

同志社大学構内遺跡発掘調査報告書

(2003・2005年度)

岩倉大鷲町地点発掘調査報告

今出川キャンパス・クラーク記念館地点発掘調査報告

同志社大学旧大学会館地点(室町殿)第3期発掘調査報告

「伊勢守」屋敷跡・相国寺旧境内(図書館西地点)発掘調査報告

2007

同志社大学歴史資料館

序

同志社大学では、2001年度以降岩倉校地・今出川校地の整備事業を行ってまいりました。いずれのキャンパスも、下層に重要な埋蔵文化財が存在し、同志社大学歴史資料館ではこれに関連する発掘調査を多数行ってまいりました。すでに、岩倉校地の同志社小学校校舎地点や今出川校地における本学寒梅館地点・臨光館地点・元北志寮地点の調査結果に関しては、発掘調査報告書を刊行して、学術情報の開示を行っています。今回、本書の刊行によって、2003年度・2005年度に行った調査の成果を公開したく存じます。

本書に掲載いたしましたのは、岩倉校地の外国人客員教員宿舎（看山ハウス）建設、今出川校地のクラーク館改修・寒梅館通路改修工事・コジェネレーション建設に関わる調査成果です。岩倉校地では、古代の条里関連の遺構が検出されました。岩倉盆地での古代土地開発の実態を示す貴重なデータです。今出川校地では、室町～戦国時代の上京における町家・武家屋敷にかかわる遺構群が検出されて、中世末期の京都を知る上で重要な調査成果となりました。

このような校内遺跡の調査を、学内機関が継続して行う意義は少なくありません。膨大な出土品の管理、本資料館や学内施設での出土品展示公開、調査学術情報の継続的なweb上での公開など、これまで行ってきた諸活動を本資料館中心に総合的に行えるメリットは大きいと考えています。今後は、このような調査体制を維持拡大して、大学が行う教育・研究活動に関連付けていくことが本資料館の重要な役割と考えています。また、こういった文化遺産の活用によって地域社会への貢献を行う努力も続けていく所存です。今後とも本資料館の活動に、ご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2007年5月

同志社大学歴史資料館
館長 齊藤 延喜

目 次

序文

(齊藤延喜)

岩倉大鷲町地点発掘調査報告 1
(市澤泰峰・鋤柄俊夫・渡辺悦子)

今出川キャンパス・クラーク記念館地点発掘調査報告 29
(市澤泰峰・鋤柄俊夫・中川敦之・疋田由香里)

同志社大学旧学生会館地点(室町殿)第3期発掘調査報告 37
(鋤柄俊夫・竹井良介・谷口浩史・中村尋・松本高子)

「伊勢守」屋敷跡・相国寺旧境内(図書館西地点)発掘調査報告 65
(池田公德・若林邦彦)

岩倉大鷲町地点 発掘調査報告

同志社大学外国人客員教員宿舎（看山ハウス）新築工事にともなう発掘調査

はじめに

同志社大学では、本学の外国人客員教員宿舎（看山ハウス）建設にともなって京都市左京区岩倉大鷲町において2003年7月4日(金)から7月18日(木)まで発掘調査をおこなった。調査成果については同志社大学歴史資料館のオリジナルホームページで随時公開するとともに、報告もおこなってきた。(http://hmuseum.doshisha.ac.jp/) 本報告は現在WEB上で公開している岩倉大鷲町地点に関する報告の紙上演である。

本調査の結果、古代を中心とする遺構・遺物が発見された。以下、主な遺構と遺物について報告する。

調査期間 2003年7月4日(金)～7月18日(木)

調査面積 241㎡

調査機関 同志社大学歴史資料館

調査担当 鶴柄俊夫（歴史資料館専任講師）

松田度（同志社大学大学院生・歴史資料館調査補佐員）

調査補佐 渡辺悦子（歴史資料館調査補佐員）

調査参加 市澤泰峰、小西沙織、齋藤夏果、杉本晃佑、眞々部貴之（同志社大学生）

I 位置と環境

i 岩倉大鷲町の歴史的環境

本調査地点は京都市左京区岩倉大鷲町36番地に所在する。

この地点は岩倉盆地内を南流する岩倉川を西に、東川を東に見る平野部にあたり、標高は95.8～96.3mである。同志社高等学校敷地内の東側に位置し、西隣して外国人教員宿舎である大鷲ハウス、グインハウスが建ち、南に同志社大学大成寮が接する。

調査地点のある岩倉の名は、当盆地北西に所在する山住神社の神体である巨石に基づく磐座信仰に由来すると考えられる。

当地域には、弥生時代の集落遺跡をはじめ、5～7世紀にかけて多くの古墳群が造成されるなど、古くから拓かれた土地であったことがうかがえる。7世紀以降の瓦陶兼業を特徴とする窯跡も数多くみつかっており、長岡・平安両京造営地の瓦の供給地として、また平安京成立以後は都市郊外の一大窯業地となっていた。

平安時代以降は、大雲寺を初めとする園城寺派天台寺院が相次いで建ち、室町時代以降は將軍足利義政をはじめ多くの貴族たちが別業を構える隠棲の地となった。また江戸時代以降は禁裏・法皇の御料地となった。



図1 調査地点（岩倉大鷲町）位置図

調査地点周辺は、大鷲町に属する。「大鷲」の名は、この地に鷲が多く飛来することによると言われるが、定かではない。

また調査地点の小字名は「門田」といい、屋敷の門に隣接する田圃の意とされる。このことから、昭和4年(1929)に同志社専門学校高等商業部が移転してくるまで、長く耕作地であったと考えられる。

調査地点を含む岩倉盆地南部は「八ノ坪」「四ノ坪」などの小字名が残るなど、条里制が敷かれたことを思わせる地割を成している。

現在も盆地の中央を東西方向に横切る一本道は、松ヶ崎や上賀茂以南に敷かれていた条里制の東西ラインにくらべ軸線がやや東に振っており、その東延長上には延喜式内社である伊多太神社の推定地がある。その北西には江戸時代より存在が確認できる三宅八幡宮が所在し、当地周辺の字名ともなっている「三宅」の名称は、古代この付近に屯倉が存していた可能性を思わせる。

ii 周辺地域での発掘・分布調査

これまで岩倉地域においては、本学と京都大学、および京都市による調査が行われている。本学による調査は1976年からおこなわれており、岩倉地域における歴史研究に大きな役割を果たしてきた。以下にその調査の成果を記す。

1、岩倉校地体育講義棟地点(岩倉忠在地遺跡) 1976年3月

体育講義棟建築工事予定地(約500㎡)内の講義棟基礎部分に12か所の調査区を設定し、表土下約1.2~1.3mまで発掘をおこなった。表土下約0.7mまでは攪乱をうけており、その下に包含層が約0.3~0.4mの厚みをもって認められる。遺構はまったく検出されず、遺物も少量であった。出土した土器の年代としては、弥生時代後期から古墳時代初頭に位置づけられる。特に弥生土器については、これまで岩倉地域においては報告がなく、岩倉地域史研究に新たな成果を報告した。

2、同志社高等学校理科館地点 1990年2月~3月、および5月

同志社高等学校理科館改築予定地(1032㎡)内に8か所の調査区を設定し、発掘をおこなった。遺構としては溝状遺構、沼状地形、岩倉川の旧河道が検出された。遺物としては、シルト層で構成される沼状地形にともなって弥生時代後期に属する少量の土器、昆虫遺体、カヤ、ツクバネ等の木の实、ヒノキ属の樹根が検出された。その他の遺物としては、弥生時代後期に属する弥生土器、古墳時代および古代の須恵器、土師器、須恵質土器、灰胎陶器、中近世に位置づけられる白磁が出土している。

3、同志社高等学校情報センターおよび生徒部棟地点 2002年8月

同志社高等学校情報センターおよび生徒部棟建設予定地に、東西10mのトレンチ2か所



図2 調査地点周辺図

をふくめ計4か所の調査区を設定し、発掘をおこなった。Ⅰ・Ⅱトレンチでは現地表下1.8mまで、Ⅲ・Ⅳトレンチでは現地表下2.3mまで調査をおこなった。南に緩やかに下がる旧地形に0.25～0.55mの客土をして校地の造成がおこなわれていることが判明した。トレンチ相互間に多少の相違はあるものの、基本的には旧岩倉川に起源をもつ、粒度と粘度を異にする砂礫層が互層となり、旧地表下1～1.2m付近に、20～35cmの植物遺体を多量に含むシルト層を挟んでおり、一時的に湿地状の景観が現れた時期があったようである。このシルト層は同志社高等学校理科館地点の調査でも確認されている。いずれのトレンチおよび土層からも遺物の出土はなく、また遺構も検出されなかった。

京都大学においては、7～8世紀の岩倉古窯跡群の分布調査と、それともなう須恵器と瓦についての研究がおこなわれている。以下にその成果を記す。

1970年から1991年にかけての京都大学考古学研究会による岩倉地域での踏破調査によって、当該地域の7～8世紀における須恵器と瓦を中心とする窯業生産があきらかにされた。須恵器窯として、深泥池南岸・深泥池東岸・妙満寺・妙満寺裏庭・木野・中の谷・皆越・はぶ池窯跡が、瓦窯として深泥池瓦窯跡が、須恵器・瓦兼業窯として、木野墓窯跡、栗栖野窯跡群、元稲荷窯跡が確認されている。

須恵器生産においては、各窯跡から検出された遺物の詳細な分析によって、7世紀第1四半期～7世紀第2四半期に深泥池東岸窯跡、元稲荷窯、深泥池南岸窯跡が、7世紀後半に木野墓窯跡、妙満寺窯跡、深泥池東岸窯跡、妙満寺裏庭窯跡、栗栖野窯跡群が、7世紀末～8世紀初頭に木野窯跡、中の谷窯跡が、8世紀中葉を中心として皆越窯跡が、8世紀後葉に、はぶ池窯跡が操業していたと結論づけている。

また、7世紀の北山背における古代寺院の創建ともなう瓦生産との関係において、特に7世紀前半に遡る元稲荷窯について、北野廃寺式軒丸瓦を問題とし、同范瓦の焼かれていた準上り窯で意匠が生み出され、その後洛北で展開することから、宇治から岩倉へと范型が移動し、元稲荷窯で北野廃寺式軒丸瓦の製作にたずさわった工人達がその後、北野廃寺瓦窯での北野廃寺式軒丸瓦などの瓦生産にたずさわわり、さらにその瓦が広隆寺や大津の穴太廃寺へと配給されていることをあきらかにしている。

北野廃寺の創建ともなう元稲荷窯の操業のあと、岩倉における瓦生産は一時中断され、7世紀第3四半期に再開される。これは北白川廃寺の創建ともなうもので、木野墓窯の操業に始まり、以後多くの窯跡で瓦を生産している。木野墓窯にわずかに遅れて深泥池瓦窯でも操業がおこなわれるが、両者は、軒丸瓦の瓦范の違いや、平瓦に見られる叩き板が全く異なること、さらに瓦専業窯と須恵器・瓦兼業窯という操業形態の相違により、工人の系統が異なっていたと考え、木野墓窯においては新来の瓦工のもとで岩倉の須恵器工人が動員されて操業したものであり、深泥池瓦窯の工人は7世紀前半の元稲荷窯の系統につながり、広隆寺や穴太廃寺の瓦生産にたずさわったあとで、再び岩倉に戻ってきた人々であるとしている。

その後、深泥池瓦窯の瓦工たちは北野廃寺の軒丸瓦の生産にあたり、木野墓窯の瓦工たちは、特殊叩きと一括した平瓦を生産したグループや、栗栖野窯跡群で生産にあたったグループなど、複数の系統に分かれ、一部が広隆寺や北野廃寺の瓦生産にたずさわったとしている。さらに一定の時間の経過後、広隆寺や北白川廃寺出土の平瓦からうかがえるよう

に、異なる文様の叩き板を保持していた木野墓窯系統の工人と深泥池瓦窯系統の工人が同じ工房において協業するようになったとしている。

岩倉での瓦生産は当初、在地の寺院建立に際し、そのための瓦の供給という側面をもって開始されたが、のちに、寺院近傍での専業生産へと移行して行くなかで、岩倉の瓦の生産基地としての役割は7世紀の中で終焉し、以後は須恵器生産が続いて行くことになる。そして、9世紀初頭に平安京所用の瓦を生産する官営瓦窯のひとつとなり、緑釉瓦生産という最先端の技術を保持して、都の需要に応じる瓦生産の拠点として、7世紀の在地的な瓦生産から、その役割を変化させて瓦生産を再開するとしている。

京都市による岩倉忠在地遺跡の調査は、1981年から2002年まで断続的におこなわれている。以下にその主な成果を記す。

1、市立洛北中学校校舎地点 1981年5月～6月 150㎡。

近辺の地山層となっている茶褐色砂泥層が一部認められたほかは、大部分が流れ堆積の砂礫層で、弥生時代から古墳時代の遺物包含層が確認された。また砂礫層の上面で、東西方向の平安時代中期の溝が一条検出された。幅1～1.5m、深さ0.1～0.3m。砂礫層の上層では平安時代の土師器の皿と甕、須恵器の杯と壺と甕、緑釉陶器の椀と皿等が、下層からは量は少ないが、弥生時代後期～古墳時代後期の土器の壺や甕等が出土している。

2、市立明德小学校南分校地点 1983年 600㎡。

上から耕土、床土、暗褐色泥砂層が堆積し、その下に砂礫層が3m以上堆積していることを確認するとともに、平安時代～鎌倉時代の遺物包含層を検出。暗褐色泥砂層からは平安時代～鎌倉時代の遺物が出土、下層の砂礫層からは遺物の出土は認められなかった。遺構としては、0.8m×1mの楕円形を呈し深さ0.15mを測るものと、径0.7mのほぼ円形で深さ0.25mの土坑2基が検出されている。遺物としては、平安時代～鎌倉時代の土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器などが出土している。これらの遺物のほとんどは暗褐色泥砂層より出土したものであり、土坑から出土した遺物は少ない。

3、岩倉忠在地遺跡 2002年2月 立会。

洛北中学校内に二ヶ所の調査区が設けられ、一方では地表下0.6m以下で黄褐色砂礫の地山を、他方では地表下0.8m以下で褐色泥砂の地山を確認している。岩倉東公園予定地内に設けられた調査区では、地表下1.62mで古墳時代前期の包含層が確認され、土師器壺・甕・鉢・高坏が出土している。

他に、京都市住宅供給公社・岩倉中在地調査団によって、盆地北部の岩倉中在地遺跡が調査されている。

岩倉中在地町宅地造成地域内 1972年。

明確な遺構は検出されず、遺物としては、縄文時代の石匙・石鏃、奈良時代の須恵器・土師器、平安時代の土器・陶磁器・銅銭・瓦、中世の陶磁器、近世の銭貨等である。

II 調査の成果

i 調査の経緯と概要

1 調査の経緯

今回の発掘調査は、同志社大学が同岩倉校地内に建設を予定している、外国人客員教員宿舎（看山ハウス）新築工事にとまなうものである。同志社大学では、上記の周辺地域の発掘調査成果をふまえ、同志社大学歴史資料館を調査主体とし、当該地点における埋蔵文化財の確認と記録を目的に、2003年7月4日（金曜日）から7月18日（水曜日）の期間で発掘調査を実施することとなった。

なお今回の調査では、調査区を大きく東西にわけて、掘削士の置場を確保しながら掘り下げを行い、調査区内に計6つのトレンチを設定し、トレンチごとに掘り下げと記録を行った。

2 基本層序（図4）

基本層序は、地表下0.4mまでが腐植土を含む暗褐色土と砂質土（第1層：表土）、その下部に厚さ0.15mの黒褐色土・10YR3/2シルト（第2層：耕作土）、その下に厚さ0.2～0.3mの褐色土・10YR4/3及び4/4粘土及び砂混じりシルト（第3層：床土）が堆積し、地表下0.7～0.8mで灰褐色土・10YR5/1～6/1砂および礫（地山）にいたる。これらの堆積状況をふまえ、第3層上面と地山上面で遺構の検出を行った。

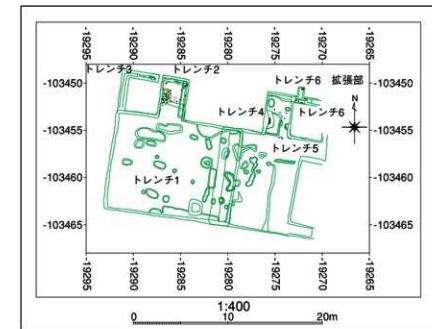


図3 トレンチ配置図

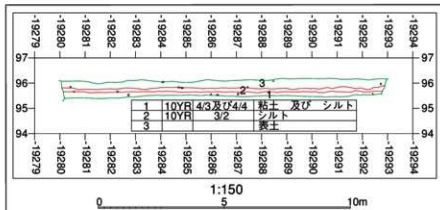


図4 1トレンチ南壁

3 調査の概要

第3層上面では土坑および溝を検出した。溝は調査区南半部で南北方向に、調査区北半部で東西方向に軸をそろえるもので、耕作にともなう溝と考えられる。土坑、溝ともに出土遺物は少なく、近代以降の磁器片と、混入とみられる須恵器が数点出土している。なお、第3層上面で検出した井戸（土坑5）から、須恵器とともに17世紀初頭に位置づけられる土器・陶磁器の破片が出土している。後述する条里地割遺構の一部を切る遺構である。

地山上面では東西方向に軸をもつ条里地割遺構を検出した。本遺構は地山上面に、盛土によって形成されている。盛土内およびその周辺からは、8世紀から9世紀にかけての須恵器が出土している。この遺構が機能していた年代は、近代以降の土坑により遺構が切られていること、近代以降の耕作土により遺構が埋没していることから、近代までの長期間にわたる可能性がある。また、調査区の東端部では地山を削り出した南北方向に伸びる高まりがみられた。東西方向の畔との関連性も考えられる。

ii 遺構と遺物

1 遺構

a 1トレンチ（図5、6、写真1、2、3）

溝4はトレンチ1第3層上面の調査区東端沿いで南北にはしり、南北の長さ2.23m、東西の幅0.63mを検出し、溝1によって切られる。溝5も同じくトレンチ1の調査区東端を南北にはしり、南北の長さ3.62m、東西の幅0.82mを検出し、北端を溝1に、南側を東西両方向から土坑に切られている。溝3はトレンチ1第3層上面のほぼ中央を東西方向にはしる。東西の長さ3.68m、南北の幅0.9cmを検出し、東端を土坑で切られる。

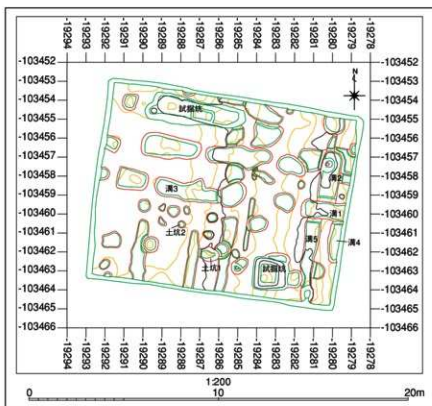


図5 1トレンチ第3層上面

土坑1はトレンチ1第3層上面の調査区南側のほぼ中央で、南北の幅0.82m、東西の幅1.1mを検出し、東側で南北にはしる溝を切る土坑をさらに切っている。土坑2はトレンチ

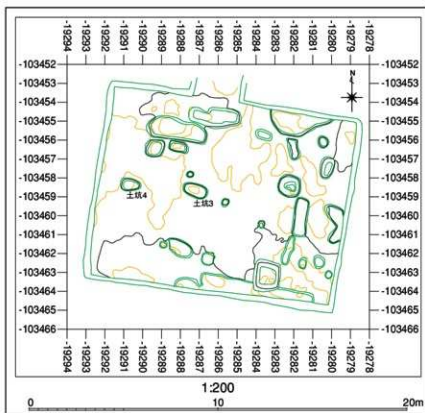


図6 1トレンチ地山面

1 第3層上面の調査区南側の西寄りに、径0.4mを検出する。周囲にほぼ同形の土坑が当土坑を含め5つ群在する。

土坑3はトレンチ1地山面の調査区北東寄りに、南北の幅0.8m、東西の幅1.35mを検出する。土坑4はトレンチ1地山面の調査区南東寄りに、南北の幅0.7m、東西の幅1.1mを検出する。

b 2トレンチ (図7、8、写真4、5、6、7、8、9、21)

溝6はトレンチ2第3層上面で、検出された群状遺構(後述の条里地割遺構)の北側で東西

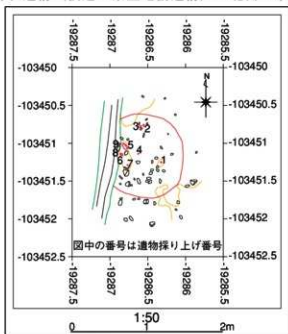


図8 トレンチ2土坑13

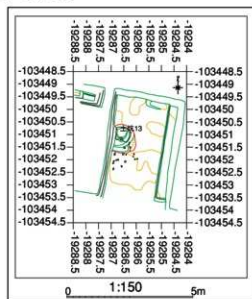


図7 トレンチ2第3層上面

方向にはしる。東西の長さ3m、南北の幅0.82mを検出したが、条里地割遺構(後述)の掘り下げとともに消滅した。

土坑13はトレンチ2の条里地割遺構の最下部、地山上面で、南北の幅1.1m、東西の幅0.85mを検出する。西側は調査区外へのびるため規模は不明である。

c 3 トレンチ (図9、写真10)

土坑6はトレンチ3第3層上面の調査区東端で、南北の幅0.4m、東西の幅1.3mを検出するが、南は調査区外にのびるため規模は不明である。土坑8の南側を切っている。土坑7は同じくトレンチ3第3層上面で、南北の幅0.6m、東西の幅0.85mを検出する。土坑6と同じく、土坑8をきっている。土坑8は、同調査区内の北端に東西にはしり、東西の長さ2.4m、南北の幅0.4mを検出するが、東西両端及び北端が調査区外にのびるため規模は不明である。南側を土坑6、7に切られている。

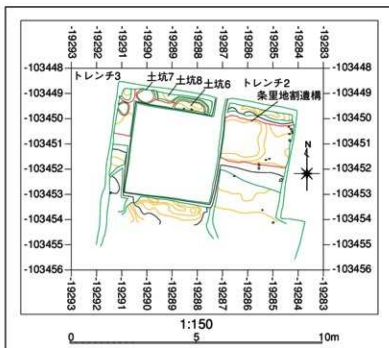


図9 2・3トレンチ第3層上面

d 4 トレンチ (図10、写真11、12、13、14、15、17)

土坑9はトレンチ4第3層上面の調査区北端に、南北の幅0.65m、東西の幅2mを検出するが、調査区外にのびるため規模は不明である。北端にある土坑を切っている。土坑12は、土坑5の井戸(後述)の掘り方と思われる。南北の幅2.35m、東西の幅1.45m以上を検出する。

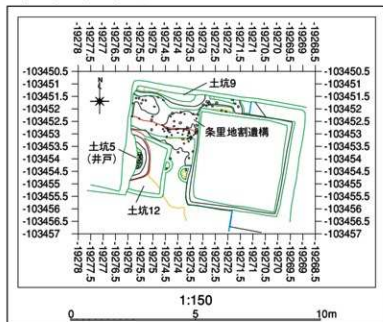


図10 4トレンチ第3層上面

⑤ 5 トレンチ (図11、写真16、17、18)

溝7はトレンチ5第3層上面の調査区南側で南北方向にはしり、南北の長さ1.5m、東西の幅0.32mを検出する。溝8はトレンチ5第3層上面の調査区北側で東西方向にはしり。西半分は正方形をなし、東半分は中央部が南側へ凸形に突出する。東西の長さは3.7m、南北の幅は最大1.6m、最小0.25mを検出する。溝9はトレンチ5第3層上面の調査区ほぼ中央で南北方向にはしり、北端より5mのところから西側へ幅を増す。南北の長さ7m以上、東西の幅は最大0.9cm、最小0.2mを検出する。

土坑10はトレンチ5第3層上面の調査区東側中央に、南北の幅0.8m、東西の幅0.9mを検出する。東側が溝に、西側が土坑11に隣接する。

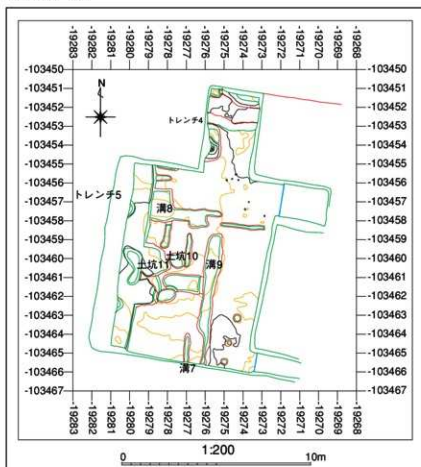


図11 4・5 トレンチ第3層上面

2 主な遺構と遺物

a 条里地割遺構 (図12, 13, 14, 24、写真6、7、8、11、20、23、29、30、31、表1)

東西方向に軸をもつ畦状の遺構である。トレンチ2からトレンチ6にまたがって検出された。幅は畦上面の広いところで1.7m以上、長さは調査区内で17m以上を検出している。盛土の高さ約0.4mが残るこの畦は、地山上面に、地山起源の砂礫が混じる盛土によって形成されている。上層は礫が細かく、堅くしまった粘質土である。土色は10YR4/3及び4/4で、上部に2、3cm粒の石を敷きつめていた。路面の可能性が考えられる。盛土の中・下層は大粒の礫が多く、上層に比べやや砂質である。中層は10YR4/3及び4/4粘土、下層は10RY4/3粘土及びシルトで、掘り下げ中に土器、陶器が出土している。また、条里地割遺構の幅を確認するため、トレンチ6の一部を拡張した結果、東西方向にのびる浅い溝状の落ち込みを検出した。条里地割遺構の北裾部分を示す可能性がある。

なお、トレンチ2の下層を除去した地山上面で、土坑状の落ち込み(土坑13・後述)を検出している。

条里地割遺構検出中の遺物としては、土器、須恵器、瓦、鉄滓がある。

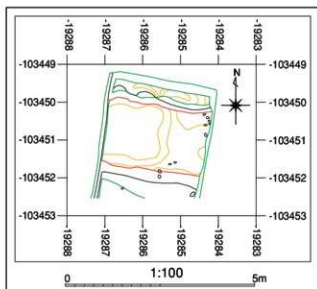


図12 2トレンチ条里地割遺構上層

転ナデによる調整をうけ、外面は粗雑である。体部外面中央でおさえをうけ、外面上部はヘラ削りがなされている。内面は両端部でおさえをうける。径は上部平坦部が7.6cmであり、残存部で11.0cmである。成形にはろくろが用いられていると考えられる。器種は坏蓋である。

7は須恵器である。胎土はきめ細かく、焼成は堅緻である。内面と外面体部は回転ナデによる調整をうけ、外面底部はヘラ削りによる調整をうける。体部はゆるやかにちがが

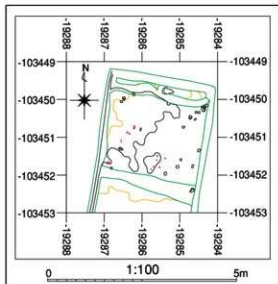


図14 2トレンチ条里地割遺構下層

16は土師器である。色調は5R6/6であり、胎土はきめ細かく、焼成はややまあい。高台ははりつけ高台である。高台は高く、内面は緩やかにちががる。外面は中央部分でおさえを受けている。高台端面は平らに成形されている。高台径は14cmである。器種は坏身で、産地は不明である。時代は8世紀前半代と考えられる。

条里地割遺構の上層からの出土遺物としては、土器、須恵器、鉄製品がある。

5は須恵器である。胎土はきめ細かく、焼成は堅緻である。調整は内面が回

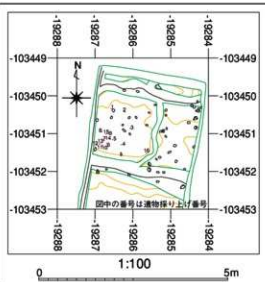


図13 2トレンチ条里地割遺構中層

る。底部径は6.8cmである。器種は坏身であると考えられる。

条里地割遺構の中層からの出土遺物としては、土器、須恵器がある。

15は須恵器である。内面にのみ自然軸がかかる。胎土はきめ細かく、焼成は堅緻である。体部は外反しながらちががる。口縁端部は内面外面ともにわずかにはりだしている。口径は25cmである。器種は壺と考えられる。

条里地割遺構の下層からの出土遺物としては、土器、須恵器、鉄滓がある。

23は鉄滓である。流出滓と考えられ、図の右から左方向に流れた波状の痕跡がある。また、右半部は錆が少ないが、左半部は錆が多く、小さな気泡が抜けたと思われる孔が多くあく。裏面は表面に比べてややなめらかで、丸みをもっており、溝に溜まった形状を反映している。鉄分を多く含み、精錬技術としては低い段階のものであると考えられる。

b 土坑5 (図10、24、写真14、15、表1)

土坑5は、石組の井戸である。トレンチ4第3層上面の調査区西端で、南北の長さ2m、深さ1.4mを検出したが、西側は調査区外にのびるため規模は不明である。埋土は、上層が10YR4/2砂混じりシルト、下層が10RY4/3及び4/2粘土及びシルトである。なお土坑12は、土坑5の井戸の掘り方と思われる。

土坑5(井戸)からの出土遺物としては、土器・陶器、須恵器、石がある。

1は須恵器である。胎土はきめ細かく、焼成は堅緻である。内外面ともに回転ナデによる調整がなされている。口縁端部は両面からおさえをうける。下方にはりだしている。小片のため径は不明である。器種は坏蓋である。

2は須恵器である。胎土はきめ細かく、焼成は良好である。内面外面ともに回転ナデによる調整をうける。口縁部端部は下方にはりだしている。小片のため径は不明である。器種は坏蓋と考えられる。

17は土師器である。胎土はきめ細かく、焼成はややあまい。内面と口縁部は回転ナデによる調整をうける。外面体部はユビ押さえによる調整をうける。小片であるため径は不明である。器種は皿である。

また、図示できないが瀬戸美濃系の灰軸陶器も出土している。胎土はきめ細かく、焼成は良好である。小片であるため機種、径ともに不明である。時代は16世紀末から17世紀初頭にかけてである。

c 土坑11 (図11、24、写真16、表1)

土坑11は5トレンチ西端中央に、南北の幅1.8m、東西の幅1.65m以上を検出するが、調査区外にのびるため規模は不明である。南に向かってふくらみをもつ。

土坑11からの出土遺物としては、土器、須恵器がある。

3は須恵器である。胎土はきめ細かく、焼成は堅緻である。内外面ともに回転ナデによる調整をうける。外面中央部でおさえをうける。内面は口縁部端部で軽なおさえをうける。口縁部端部は下方にはりだしている。小片のため径は不明である。器種は坏蓋である。

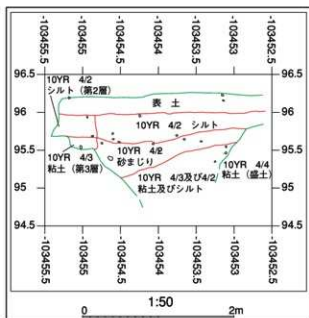


図15 4トレンチ東壁(土坑5)

d 溝1 (図5、24、写真1、表1)

溝1はトレンチ1第3層上面の調査区東端で東西方向にはしり、東西の長さ2.3m、南北の幅0.9mを検出した。

溝1からの出土遺物としては、土器、磁器、須恵器がある。

4は須恵器である。胎土はきめ細かく、焼成は良好である。器種は蓋と考えられる。外面にははっきりとした稜線が一本めぐっている。口縁端部は下にむかってすこしはりだしている。成形にはろくろが用いられている。小片であるため、直径は不明である。時代は9世紀前半代と考えられる。

e 溝2 (図5、24、写真1、25、26、表1)

溝2はトレンチ1の調査区東端で、南北方向にはしり、南北の長さ2.6m、東西の幅1.1mを検出し、溝1によって切られている。

溝2からの出土遺物としては、土器、陶器、磁器、鉄製品、鉄滓がある。

19は陶器である。内面にのみ軸が施されている。胎土はきめ細かく、焼成は良好である。外面には格子状に筋が入れられている。体部はゆるやかにたちあがり、口縁部端部は丸みをおびている。口径は5.8cmで、高台径は2.6cmであり、器高は2.4cmである。器種は小坏である。

22は染付である。透明軸がかかる。体部はゆるやかにたちあがり、口縁部端部は丸みをおびている。口径は11cmであり、高台径は4.8cmである。器種は皿である。

3 遺物

掘り下げ中に出土した遺物はトレンチごとに、表面採集した遺物についてはまとめて詳述する。

a 1 トレンチ (図16、24、写真27、表1)

表土掘削中の出土遺物としては、土器・陶器、磁器、須恵器、鉄滓がある。

21は染付である。透明軸が施されている。体部は緩やかにたちあがり、口縁部端部は尖

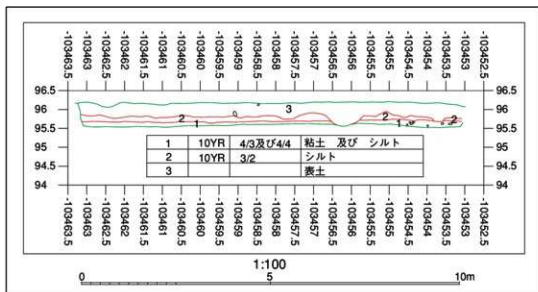


図16 1 トレンチ西壁

り気味に成形されている。口径は5.6cmであり、高台径は3.0cmであり、器高は3.3cmである。器種は小坏である。内面には判読不能であるが、朱書がある。時代は近代以降のものである。

b 2 トレンチ (図17, 24, 写真28, 表1)

地山上面からの出土遺物としては、土器・陶器、磁器、須恵器がある。

9は須恵器である。器種は高坏と考えられる。胎土はきめ細かく、焼成はややあまい。脚部ははりつけである。脚部径は4.6cmである。外面は回転ナデによる調整を受けており、内面はユビナデによる調整を受けている。

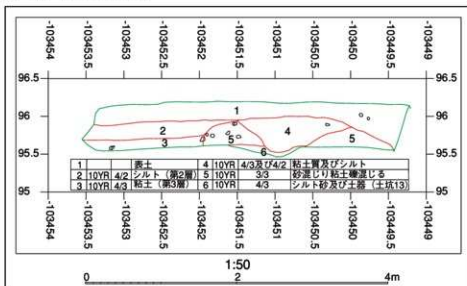


図17 2 トレンチ西壁

c 3 トレンチ (図18, 24, 写真32, 33, 34, 表1)

表土掘削中の出土遺物としては、土器・陶器、磁器、須恵器、鉄製品がある。

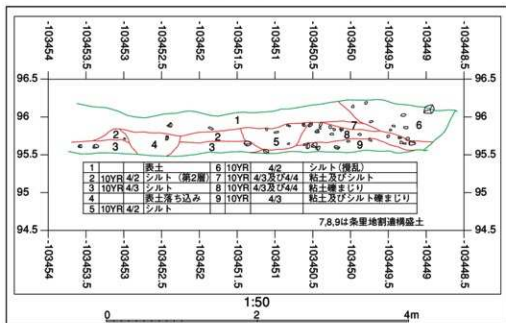


図18 3 トレンチ西壁

10は須恵器である。胎土はきめ細かく、焼成は堅緻である。内面外面ともに回転ナデによる調整がなされている。体部はやや垂直にたちあがる。外面底部は回転ヘラ削りがなされている。高台は低く、はりつけ高台である。高台の内側部分は丸みをもって調整されている。高台底部に一本沈線がめぐっている。高台径は9.2cmである。器種は坏身と考えられる。

第3層からの出土遺物としては、土器、磁器、須恵器、鉄製品がある。

12は須恵器である。胎土はきめ細かく、焼成は堅緻である。内面外面ともに回転ナデによる調整をうけている。体部はゆるやかにたちあがり、最下部でおさえをうける。外部底面は回転ヘラ削りがなされている。高台は低く、はりつけ高台であり、やや焼けひずんでいる。底部端面は平らに調整されている。高台径は8.0cmである。器種は坏身である。

d 4 トレンチ (図19、24、写真35、36、表1)

第3層からは出土遺物として、土器・陶器、磁器、須恵器、緑釉陶器の軟質素地がある。

14は緑釉陶器の軟質素地である。胎土はきめ細かく、焼成は良好である。内面外面ともに丁寧なナデ調整が施されている。内面底部に一本の沈線がめぐる。高台は削り出し高台であり、底面は平らに調整されている。高台径は8cmである。器種は碗または皿と考えられる。

18は土師器である。胎土はきめ細かく、焼成は良好である。内面と口縁部端部は回転ナデによる調整をうける。外面体部はユビおさえによる調整をうける。体部は外反し、口縁部は丸みを帯びる。口径は9cmである。器種は皿と考えられる。

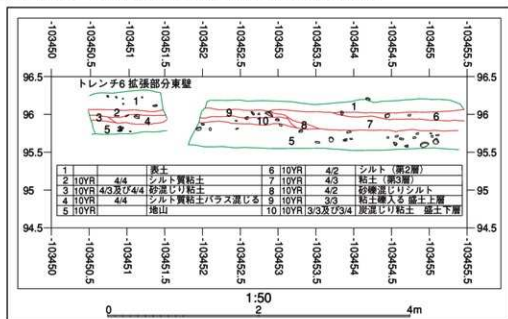


図19 4・6 トレンチ東壁

⑤ 5 トレンチ (図20, 21, 24, 写真37, 表1)

第3層からの出土遺物としては、土器・陶器、磁器、須恵器、瓦がある。

20は磁器である。透明軸がかかる。胎土はきめ細かく、焼成は良好である。体部は内湾しつつちあがる。口縁部は尖り気味に成形されている。外面底部は軸が施されていない。口径は4cmであり、高台径は3cmである。最大径は4.8cmである。器高は3.2cmである。器種は小坏である。

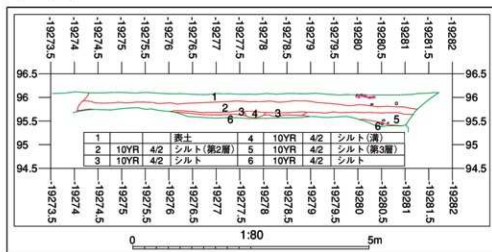


図20 5 トレンチ南壁

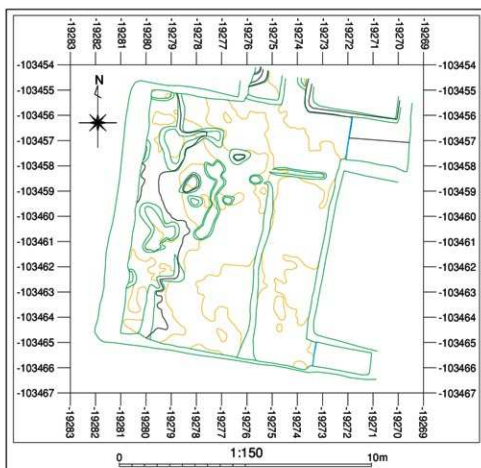


図21 5 トレンチ地山面

f 6 トレンチ (図22, 24、写真38, 39、表1)

第3層からの出土遺物としては、須恵器、鉄製品がある。

6は須恵器である。胎土はきめ細かく、焼成は堅緻である。内外面ともに回転ナデによる調整をうける。つまみ部は低くつぶれている。外面には回転ヘラ削りの痕が残っている。残存径は9.0cmである。器種は坏蓋である。

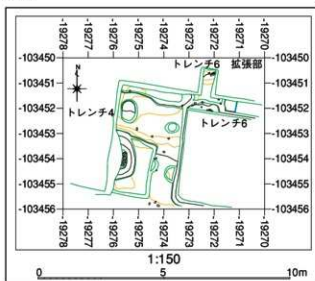


図22 4・6トレンチ地山面

g 6 トレンチ拡張部分 (図23, 24、写真19, 22、表1)

第3層からの出土遺物としては、土器・陶器、須恵器がある。

11は須恵器である。胎土はきめ細かく、焼成は堅緻である。内外面ともに回転ナデによる調整をうけている。体部はゆるやかにたちあがる。底部は回転ヘラ削りがなされている。高台ははりつけ高台であるが、はりつけ後、両面から丁寧なナデを施している。底部は平らに成形されている。小片のため径は不明である。器種は坏身である。

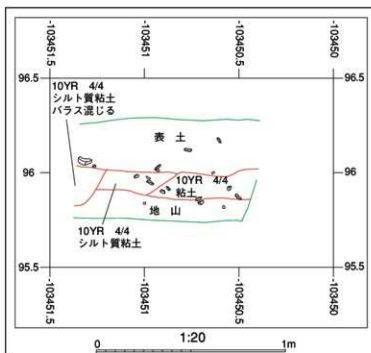


図23 6トレンチ拡張部西壁

h 表採遺物 (図24、写真40、表1)

表採遺物として、土器、須恵器、緑釉陶器の素地がある。

8は須恵器あるいは緑釉陶器の硬質素地である。胎土はきめ細かく、焼成はややあまい。器種は皿と考えられる。内面底部に沈線がめぐる。高台は削りだし高台であり、高台底部は回転ヘラ削りがなされている。高台径は6cmである。

13は緑釉陶器の硬質素地である。胎土はきめ細かく、焼成は堅緻である。器種は皿と考えられる。高台は削りだし高台と思われるが、断面に軟質の胎土を残すため、複雑な製作過程を経た可能性も残す。高台底部は回転ヘラ削りがなされている。高台径は8.8cmである。

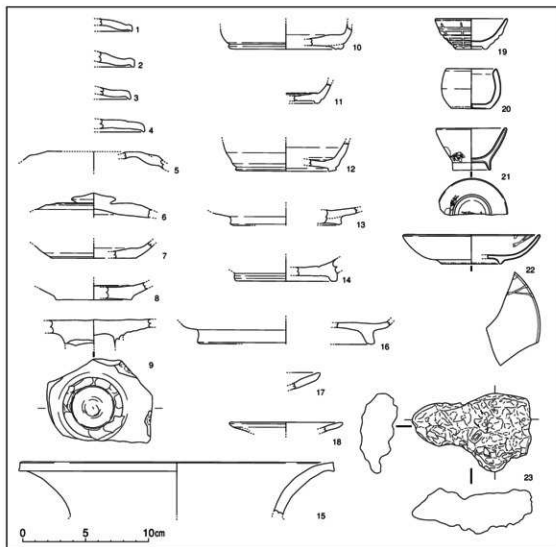


図24 出土遺物実測図 (S=1/3)

	土器	陶器	磁器	須恵器	緑釉陶器	瓦	鉄製品	鉄滓	石	骨	木
土坑1	●										
土坑2	●										
土坑3			●								
土坑4	●										
土坑5	18			1, 2					●		
土坑6									●		
土坑7		●	●	●		●					
土坑8				●							
土坑9				●							
土坑10									●		
土坑11	●			3							
土坑12				●							
土坑13	●			●							
溝1	●		●	4							
溝2	●	20	23				●	●			
溝4	●										
溝5	●	●	●			●	●				
溝6	●	●	●				●	●	●	●	●
溝7									●	●	
溝8	●		●								
溝9	●										
糸里地割遺構検出中	17			●		●		●			
糸里地割遺構上層	●			5, 7			●		●		
糸里地割遺構中層	●			16					●		
糸里地割遺構下層	●			●				24			
1トレンチ表土掘削中	●	●	22	●				●	●		
1トレンチ地山上面	●	●									
2トレンチ第2層	●										
2トレンチ地山上面	●	●	●	9							
3トレンチ表土掘削中	●	●	●	10			●		●		
3トレンチ第3層	●	●	●	12			●				
4トレンチ表土掘削中	●	●	●	●							
4トレンチ第3層	19	●	●	●	14						
5トレンチ第3層	●	●	21	●		●			●		
6トレンチ表土掘削中		●	●								
6トレンチ第3層				6			●		●		
6トレンチ拡張部分表土掘削中				●							
6トレンチ拡張部分第3層	●	●		11, 15							
表採	●			8	13						

表1 遺構・遺物一覧

●は遺物が出土していることをあらわし、数字は実測図番号に対応する。

まとめ

今回の発掘調査では、条里地割に関連する遺構を検出することができた。この条里地割の名残については、明治年間の地形測量図にも記載されており、同志社商業高校が昭和4年(1929)に当地へ移転する以前の地割と景観を知る資料となる。今回の調査では、調査面積の制約もあり、条里地割の成立時期を厳密に決定できる資料を得ることができなかったが、条里地割遺構の盛土内に包含されていた須恵器の年代から、その成立が8世紀をさかのぼることはないといえる。また、同志社高校敷地内の西側(同志社高等学校理科館地点)において行われた1990年の調査で、沼地状地形の上に堆積していた包含層から10世紀代に位置づけられる灰軸陶器が出土していることも、上記の年代を考えるうえで参考となる。よって、すくなくとも現状では、9~10世紀頃にはこの条里地割が成立していたと考えてもよいのではないだろうか。

今回の調査で注目されるのは、少量ではあるが土器・陶器とともに、鉄滓が出土している点である。これは、周辺に鍛冶関連の空間が存在していたことを示すとともに、古代の岩倉地域でほぼ唯一の集落遺跡とよい岩倉忠在地遺跡や、今回の発掘調査地点の性格を考えるうえでも重要な発見である。

岩倉地域は、すでにふれたように平安京に供給される土器・瓦の主要生産地でもある。これらの需要にともなう当地域の重要性の高まりや、安定したやきもの・瓦製品の供給を考慮した製品集散地(たとえば屯倉・御厨に代表される官営施設)の造営が、上記のような条里地割の施行につながったとも考えられる。古代窯業生産との関係で論じられることの多かった当地において、条里地割と鍛冶に関連する資料が得られたことは、岩倉地域での条里の成立背景、生産・流通経路の理解に、大きな手がかりを与えるものといえよう。

これまでの調査で、岩倉地域においては縄文時代から近世に至るまでの遺構、遺物が確認されている。そのなかで重要視しなければならないのは、須恵器や瓦、緑軸・灰軸陶器等の生産にかかわる遺構、遺物である。その生産の様相は、京都大学考古学研究会が述べているように、時代とともに変化をさせている。そういったなかで平安時代以降、岩倉地域は、平安京での需要にこたえるための、瓦等の生産地としての役割を担うようになる。

その一方で、岩倉地域においては条里地割の存在がはやくから指摘されている。条里制施行の説明としては、これまで現在に残る「三宅」という地名と、古代の「屯倉」との関係のなかで述べられることが多かった。

しかし、岩倉地域の性格を考えると、都の需要を満たすための生産地としての視点から、岩倉を重視し、条里制を施行したという見方が、屯倉と条里制の関係を追う以上に、必要になってくるのではないのだろうか。

また、製品輸送をおこなう場合、岩倉で生産された製品が一旦集積されてから平安京へと運ばれていたと考えられる。その集積がおこなわれた場所としては、岩倉地域最大の遺跡であり、縄文時代から近世まで続く岩倉忠在地遺跡がその可能性が高いと考えられる。

これから岩倉地域史を考えてゆく場合には、生産と条里地割、岩倉忠在地遺跡に代表される集落と条里地割の関係に注意をしてゆく必要があるのではないかと考えられる。

ところで今回調査を行った地点は、半町ほど条里地割とずれをみせる区画の南端にあたる。「門田」という字名からみても、今回みつかった条里地割遺構が、中世以降に顕著な方形区画を伴う居館の一部として利用された可能性もある。今回の調査では居館にともなう遺構と考えられるものは確認できなかったが、中・近世に位置づけられる土器・陶磁器が少量出土している。周辺の発掘調査でも中・近世の土器・陶磁器の出土が確認されており、後世に条里の整備がおこなわれたことも考慮しておく必要がある。土師器焼成に代表される近世以降の当地の様相もまた、消費地としての都市遺跡である京都に程近いという位置関係、上記のような条里地割の整備と新たな地割の成立のなかで読み解くならば、製品の集散と宿場町的な機能を有した町並みの景観として復原することも可能である。

また、今回検出した耕作にともなう遺構とその埋没状況から、当地の土地利用が1929年の同志社専門学校高等商業部の移転以後大きく変わったことが窺える。岩倉地域における近代化資料のひとつとして、貴重な資料を得たといえる。

本報告では、岩倉盆地北部の歴史的様相や、岩倉盆地西部の生産遺跡群での研究成果を十分に生かすことができなかった。これらを含め、検討しきれなかった多くの問題点を議論し、岩倉地域史の実態を解明してゆくことがわれわれに残された今後の課題である。

参考文献

- 岩倉大鷲町史編纂委員会 1981「岩倉大鷲町」
- 同志社大学校地学術調査委員会 1976「岩倉校地体育講義棟建設予定地発掘調査概要」同志社大学校地学術調査委員会調査資料No.7
- 同志社高等学校・同志社大学校地学術調査委員会 1991「同志社高等学校理科館改築に伴う埋蔵文化財の調査」
- 同志社大学歴史資料館 2002「同志社高等学校情報センター及び生徒部棟（仮称）建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告」
- 京都大学考古学研究会 1992「岩倉古窯跡群」
- 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983「50 岩倉忠在地遺跡」〔昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）〕
- 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1985「26 岩倉忠在地遺跡」〔昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要〕
- 京都市文化市民局 2003「洛北地区」〔京都市内遺跡立会調査概報 平成14年度〕

抄 録	
所収遺跡名	岩倉大鷲町地点（いわくらおおさぎちょうちてん）
所在地	京都市左京区岩倉大鷲町36番地
コ ー ド	市町村番号 26100
	遺跡番号
北 緯	35° 04' 02"
東 経	135° 47' 18"
調査期間	2003年7月4日(金)～7月18日(水)
調査面積	241㎡
調査原因	同志社大学 外国人客員教員宿舎（看山ハウス）新築工事
調査の目的	当該地点における埋蔵文化財の確認と記録
種 別	集落遺跡
主な時代	古代
主な遺構	条里地割遺構、近代以降の溝および土坑
主な遺物	須恵器、土師器、緑釉陶器、陶磁器、鉄滓

本報告の執筆分担は以下のとおりである。

はじめに：市澤泰峰

I - i：渡辺悦子

ii：市澤

II - i：松田度

ii（遺構）：渡辺

（遺物）：市澤

まとめ：松田・市澤

本報告で用いた図のうち、図1・2は国土地理院平成9年8月1日発行の「京都及大阪2-4-3 1万分の1地形図 岩倉」を使用し、作成した。図3から図23は株式会社アジア航測が作成した原図を一部改変し、使用した。遺構図の座標はmを単位とし、-103で始まる数値が南北、-19で始まる数値が東西を示し、図中の数値および立面・断面の横軸は標高を示している。なお、本報告で用いた土色は、小山正忠・竹原秀雄「新版 標準土色帖 2001年度版」をもとにしている。

実測図については市澤泰峰・斎藤夏果が作成した。図24の製図は、アドビシステムズ株式会社のイラストレーター10を用いて本学学生がおこなった。遺物写真撮影は本学学生がおこなった。本報告の編集は、勳柄俊夫の監修のもと、市澤泰峰がおこなった。

本報告で用いた資料は、現在同志社大学歴史資料館で保管している。

なお、調査期間中、以下に記した方々のご協力を得た。記して謝意を表します。

京都市文化市民局

京都市埋蔵文化財センター

同志社高等学校

京都建築事務所

アジア航測

東海アナース

岩倉の歴史と文化を学ぶ会（中村治・森田和代）



01 1トレンチ溝群 (東から)



02 1トレンチ全景 (池山)



03 1トレンチ断面



04 2・3トレンチ全景 (第3層:左が北)



05 2・3トレンチ全景 (東から)



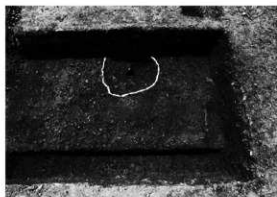
06 2トレンチ桑里地割遺構近接



07 2トレンチ桑里地割中層遺物出土状況



08 2トレンチ桑里地割下層遺物出土状況



09 2トレンチ全景(地山)



10 3トレンチ断面



11 4トレンチ桑里地割遺構近接



12 4トレンチ地山上面



13 4トレンチ断面(西から)



14 4トレンチ土坑5(井戸)



15 4トレンチ断面



16 5トレンチ全景



17 4・5・6トレンチ全景(地山)



18 5トレンチ断面(北から)



19 6トレンチ拡張部第3層(北から)



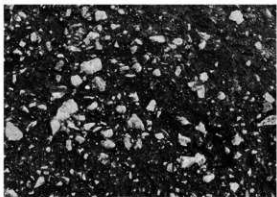
20 桑里地割遺構全景(西から)



21 2トレンチ東壁断面



22 トレンチ6拡張部分東壁断面



23 桑里地割遺構上面鉄洋出土状況



24 地山下深掘



25 1トレンチ 溝2 染付皿



26 1トレンチ 溝2 陶器小坏



27 1トレンチ 表土掘削中 染付小坏



28 2トレンチ 地山上面 須忠器高坏



29 2トレンチ 桑里地割下層 鉄滓



30 2トレンチ 桑里地割中層 須忠器壺



31 2トレンチ 桑里地割検出中 土師器坏



32 3トレンチ 第3層 須忠器坏



33 3トレンチ 表土掘削中 須忠器環



34 3トレンチ 表土掘削中 染付碗



35 4トレンチ 第3層 緑釉陶器素地



36 4トレンチ 表土掘削中 陶器壳



37 5トレンチ 第3層 磁器小坏



38 6トレンチ 第3層 須忠器環



39 6トレンチ 第3層 須忠器环蓋



40 表採 緑釉陶器硬質素地

今出川キャンパス・クラーク記念館地点発掘調査報告

はじめに

同志社大学では、今出川キャンパス内でのインフラ整備工事と、重要文化財であるクラーク記念館の保存修理工事にともない、同志社大学歴史資料館を調査主体とし、クラーク記念館地点および周辺における調査を、2003年3月から11月にかけて断続的に実施した。以下調査順に概要を述べる。

調査機関 同志社大学歴史資料館

調査組織 大会館・新町校地等整備にともなう発掘調査委員会

委員長 黒木保博（歴史資料館館長）

委員 中川要之助（理工学研究所助教授）

松藤和人（文学部教授）

竹居明男（文学部教授）

西岡直樹（文学部助教授）

井上一稔（文学部助教授）

白水 勝（施設部長）

辰巳和弘（歴史資料館助教授）

鷗柄俊夫（歴史資料館専任講師）

事務局 渡辺孝義（歴史資料館事務長）

堀川眞子（歴史資料館係長）

浦壁万里子

松本裕世

主担当 鷗柄俊夫

副担当 辰巳和弘

調査補助 松田 度（同志社大学大学院生・歴史資料館調査研究員）

渡辺悦子（歴史資料館非常勤嘱託）

調査参加 足立寛行、有門大祐、有吉康德、市澤泰峰、稲山陽子、上岡裕也、大岩根安里、大橋優美、加賀田麻衣、北中達也、北脇大貴、後藤隆、小西沙織、小林史朗、小森牧人、斎藤夏果、里見浩史、杉本晃祐、杉本祥子、杉山俊介、杉山拓己、竹井良介、武田陽介、谷口浩史、中川敦之、中澤大輔、中村尋、西村峰幸、橋口英惠、疋田由香里、樋口武芳、松岡元気、松田尚子、松本尚子、松本仁美、眞々部貴之、南真理子、山岸平、山口誠、山本真菜美、行實幹人、渡部和孝（同志社大学大学生）

石原和佳枝、伊藤通子、岡田秀之、杉尾憲次、竹内穂波、津田あきこ、吉川千代、吉崎千春

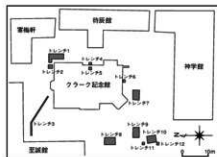


図1 今出川キャンパスクラーク記念館地点トレンチ位置図

調査概要

1、クラーク記念館・神学館前地点

(1)調査期間 2003年3月10・11日

(2)トレンチの位置

クラーク記念館、神学館の間に設けられたT字形の埋設管予定地に4カ所調査区を設置。北から順に8・9・10トレンチ、東に少し離れた調査区を7トレンチとする。

(3)層序

地表下30cmから50cmまでが近代以降の整地によって削平されていた。

(4)遺構

トレンチ10では深さ約60cmまで下げた面で、江戸時代中期頃の土坑（土坑1）の一部を検出。大きさと形状はトレンチ外にのびるため不明。

(5)遺物

土坑1から多量の貝類と染付碗1点が出土。貝類はシジミ、アカニシ、アサリ、ハマグリなどであり、最もその数が多かったのはセタシジミである。1695年（元禄8）人見必大著の「本朝食鑑」には、「江州の勢多の橋のあたりで多く採れ、その味は最も厚い」とあり、1833年（天保4）武井周作によって著された「魚鑑」には「黄疸には、味噌汁に煮て食ふ。また、煮汁にて、身を洗てよし」とされている。また、破片ではあるがアカニシと思われる貝殻も出土した。

染付は伊万里焼の碗で白地に呉須の染付が施され、草花の模様が全面に描かれている。その特徴から18世紀代のものと考えられる。

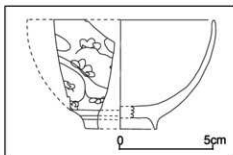


図2 土坑1出土染め付け実測図(1/2)

2、クラーク記念館地点 北西隅

(1)調査期間 2003年4月3日

(2)トレンチの位置

クラーク記念館北西隅の配水管理設予定地。3トレンチとする。

(3)層序

調査深度は地表下50cm。

(4)遺構

深さ50cmまで掘り下げたところで江戸時代のほぼ完形の胞衣壺が2個体、原位置で出土。

(5)遺物

近世土器・陶磁器ほか。胞衣壺は相国寺門前町に關係する遺物であると考えられる。

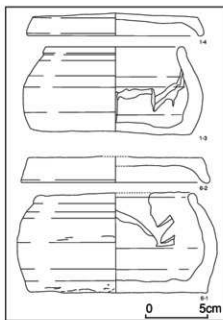


図3 トレンチ3出土胞衣壺実測図(1/3)

3、クラーク記念館 東・南側

(1)2003年4月16日

(2)トレンチの位置

クラーク記念館の東側と南側。東側を4・5トレンチ、南側を6トレンチとする。

(3)層序

調査の深度は地表下約1m。

(4)遺構

トレンチ5では石列を検出。石列は東側に面をそろえて南北方向にのび、その東側の地面が平らで乱れていないため、この石列の東が外で、西側にあった家の縁石のような役割を果たしていた可能性がある。時期は出土した素焼きの土器から、江戸時代の初め頃と思われる。

(5)遺物

近世陶磁器ほか

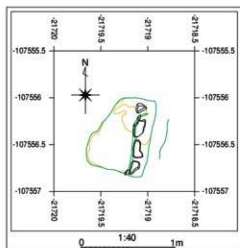


図4 トレンチ5検出石列 (1/40)

4、クラーク記念館地点 北東隅

(1)調査期間 2003年8月19～21日

(2)トレンチの位置

L字形の東側の調査区(トレンチ1)と、西側の調査区(トレンチ2)にわかる。計20m

(3)層序

調査の深度は地表下70cm(基礎工事の深さ)。

(4)遺構

トレンチ1では、地表下約40cm～50cmの深さで2つの生活面を検出。

上の生活面は一角に小石や瓦の細片を敷き固めた床(?)をもち、下の面は砂利を多く含んだ盛土を基盤とする。時期は出土遺物から、江戸時代中期以降と考えられる。

トレンチ2では、北半部でトレンチ1の上の生活面にとまるとみ

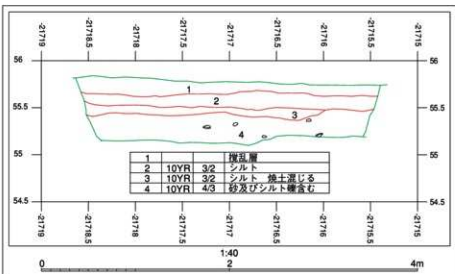


図5 トレンチ1北壁断面図 (1/40)

られる、底に焼けた木材を残し焼土で埋められた土坑（または盛土の一部？）を検出。

(5)遺物

近世土器・陶磁器（染付ほか）、直径20cm余りの縦長の埴塼。

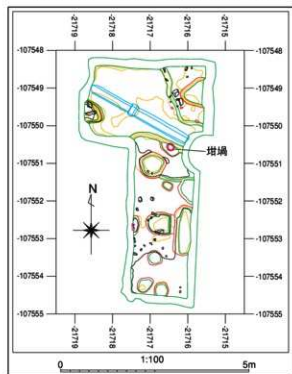


図6 トレンチ1第2面平面図(1/100)

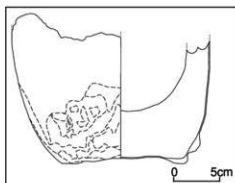


図7 トレンチ1出土埴塼実測図(1/4)

5、クラーク記念館・神学館前地点

(1)調査期間 2003年11月10日

(2)トレンチの位置

工用ゲート設置部分に設けた1m間のトレンチ2カ所。

2003年3月に実施したクラーク記念館・神学館前地点の調査の続きとして、北側から順に11・12トレンチとする。

(3)層序

トレンチ11では地表下60cmで南東方向にのびる埋管が検出され、地表下90cm（基礎工事の深さ）まで攪乱されていた。

トレンチ12では地表下75cm（基礎工事の深さ）まで煉瓦を含む近代以降の攪乱層であることを確認した。

(4)遺構

なし。

(5)遺物

トレンチ11・12ともに攪乱土中から土器、陶磁器（染付ほか）、貝類が少量出土。

まとめ

今回の調査地点は中世以降、相国寺-相国寺門前町-薩摩藩邸という変遷をたどったことが知られている。

この場所に幕末、薩摩藩邸がおかれていたことは、今出川キャンパスの西門脇の石碑で知られているが、その実態については不明な部分が多い。

『史料 京都の歴史』によれば、文久2年(1862)、国事の周旋を目的とした島津久光の上洛を機に、薩摩藩は、錦小路東洞院南東の京屋敷に対して、相国寺の南の二本松に新屋敷を造営したとされている。

(史料)

○文久3年6月1日、薩州新屋敷、相国寺辺に昨年以来造営・以下略

○文久3年6月7日、薩摩数千人、上の新屋敷へ入込み候由・以下略

「中山忠能(ただやす)日記」(王政復古に参画して、維新の後は要職を歴任した公家)

なお、同志社が相国寺門前のこの地を指定して設立の願書をだしたのは、明治8年(1875)8月23日になっている。

そこで薩摩藩屋敷とされた「二本松」がどのあたりか「寛政11年」の年号をもつ地図などを調べてみると、相国寺惣門から現在の今出川通りまでの間が「大門町」と呼ばれ、「二本松」はその西の一角を示す地名とみられる。地図によると、「大門町」の東は、今出川通りに近い部分が「伏見宮」で、その北に「御附武家」衆の屋敷がおかれ、一方西側は、相国寺惣門と今出川通りの間を三分するかたちで、今出川通りと平行する二本の小路が走り、南の小路が「石橋町」(東の伏見宮のほぼ北限ライン)、北の小路が「二本松」または「鹿苑院門前町」と呼ばれ、共にその通りに面して町屋が並んでいたとされている。

このうち「石橋町」は、その南に「冷泉家」や「藤谷家(現在の徳照館)」および「御附武家」などの敷地をおいていたため、その位置はおおむね現在の明德館あたりだったものと思われる。

であるならば、「二本松」の小路は現在のチャペルの南で、今出川キャンパスのコンコースの北側と重複することが考えられ、薩摩藩二本松屋敷は、およそそのコンコースを中心としたあたりに設けられた可能性が強いだろう。

また、クラーク記念館北東隅の調査では増場が出土した。時期としては他の出土遺物から、江戸時代中期以降と考えられる。過去の今出川キャンパス関連の調査では、中世末から近世にかけて、いたるところから鑄造関係の遺物が見つかり、その時期の上京が金属関連産業都市であった可能性が強まっている。今回の調査成果によって、その範囲がここまで広がる可能性が考えられる。

今回の調査では、近世を中心とした今出川キャンパス内の遺構・遺物を、新たな研究資料として追加することができたが、その一方で、薩摩藩邸を直接物語る痕跡を見つけることはできなかった。

狭い面積の地点情報であり、薩摩藩屋敷やそれ以前の相国寺に直接的に関わる遺構・遺

物の発見は今後の課題となるが、これらの点的な調査成果をGIS上で丁寧につないでいくことで、これまで知られていなかった歴史を明らかにしていきたいと思う。

抄 録		
所収遺跡名	クラーク記念館地点	
所在地	京都府京都市上京区相国寺門前町	
コード	市町村番号 26100	
	遺跡番号 229	
北緯	35° 01' 49"	
東経	138° 15' 43"	
調査期間	2003.3.10～11、2003.4.3、2003.4.16、2003.8.19～21、2003.11.10	
調査面積	20㎡（2003.8.19～21調査地、トレンチ1、2）	
調査原因	クラーク記念館の改修にともなう発掘調査	
種別	都市遺跡	
主な時代	近世	
主な遺構	江戸時代	土坑、石敷
主な遺物	江戸時代	埴塼、陶磁器

はじめに（市澤泰峰）

調査の概要

- 1：クラーク記念館・神学館前地点(1)～(4)(市澤) (5)(中川敦之、疋田由香里、松本仁美)
- 2：クラーク記念館地点 北西隅（市澤）
- 3：クラーク記念館地点 東・南側（市澤）
- 4：クラーク記念館地点 北東隅（市澤）
- 5：クラーク記念館・神学館前地点（市澤）

まとめ（勳柄俊夫）

本報告で用いた図のうちトレンチ配置図と遺物実測図は、アドビシステム株式会社のAdobe Illustrator10 日本語版を使用し製図を行った。遺構図は、株式会社アジア航測が作成した原図を一部改変し、使用した。遺構図の座標はmを単位とし、-107で始まる数値が南北、-22で始まる数値が東西を示し、図中の数値および立面・断面の横軸は標高を示している。なお、本報告で用いた土色は小山正忠・竹原秀雄『新版 標準土色帖2001年度版』を元としている。

本報告に掲載した出土遺物の実測・製図・写真撮影については、本学学生が中心となって行った。本報告の編集は勳柄俊夫の監修のもと、市澤泰峰が行った。



1 トレンチ10 土坑1 検出状況



2 トレンチ3 甕衣壺出土状況



3 トレンチ5 石列検出状況 (北から)



4 トレンチ1 北壁 (南から)



5 トレンチ1 第2層上面 (南から)



6 トレンチ2 第1層上面 (西から)



7 トレンチ2 出土埴輪



8 トレンチ3 出土甕衣壺

同志社大学旧大学会館地点（室町殿跡）第3期発掘調査報告

はじめに

同志社大学では、新大学会館の建設にともない、室町キャンパスから室町通りに至る通路の発掘調査を8月1日から8月26日まで実施した。調査の成果については、これまで同志社大学歴史資料館のオリジナルホームページで随時公開を行っている。

(<http://hmuseum.doshisha.ac.jp>)

調査の結果、近世の遺構・遺物が発見された。以下、主な遺構と遺物について概要を述べる。

調査期間 2003年8月1日～2003年8月26日

調査面積 90㎡

調査機関 同志社大学歴史資料館

調査組織 大学会館・新町校地等整備にともなう発掘調査委員会

委員長 黒木保博（歴史資料館館長）

委員 中川要之助（理工学研究助教授）

松藤和人（文学部教授）

竹居明男（文学部教授）

西岡直樹（文学部助教授）

井上一稔（文学部助教授）

白水 勝（施設部長）

辰巳和弘（歴史資料館助教授）

鐮柄俊夫（歴史資料館専任講師）

事務局 渡辺孝義（歴史資料館事務長）

堀川眞子（歴史資料館係長）

浦壁万里子

松本裕世

主担当 鐮柄俊夫

副担当 辰巳和弘

調査補助 松田 度（同志社大学大学院生・歴史資料館調査研究員）

渡辺悦子（歴史資料館非常勤嘱託）

調査参加 市澤泰峰、上杉望美、江口なな子、大橋優美、大場幸、川西知世、北脇大貴、久保瑞枝、熊崎加奈子、桑野麻友子、樺かおり、小久保聡美、後藤隆、小西沙織、小西茉莉枝、齋藤夏果、佐久間和彦、杉本晃祐、杉山拓己、田垣内佳那、竹井良介、武田陽介、谷口浩史、中川敦之、中村尋、西村峰幸、坂野真由美、疋田由香里、樋口武芳、平岩佐知子、廣田茜、藤倉貴志、藤本翔太、堀井佳代子、松本尚子、松本仁美、真鍋亜祐美、三宅香葉子、森末謙、柳井さほり、山口誠、山本真菜美、渡部和孝（同志社大学大学生）
石原和佳枝、伊藤通子、岡田秀之、杉尾憲次、竹内穂波、津田あきこ、吉川千代、吉崎千春

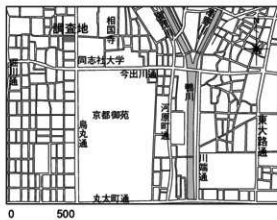


図1 キャンパス位置図

I 調査の経緯

1 位置と環境

本調査地点のある上京地域は、平安時代において一条より北のいわゆる京外であった。それが平安時代中期になると、都市城が一条大路を北に越え、鎌倉時代に入ると、西園寺公経が町通一条北に邸宅を築き、また現在の同志社幼稚園周辺に北島雅家亭があったことなどが知られている。

そのような中、伏見天皇（1265～1317）が、里内裏の一つとなっていた持明院殿を自身の仙洞御所としたことにより政治の拠点となっていく。それに伴い持明院大路（現在の立売通に比定）といった東西の大路が整備され、周辺には「今大路殿」、「常磐井殿」などの院の御所を初めとし、多くの貴族邸が点在していた様子を記録で確認できる。

南北朝の争乱を経て室町時代に入ると三代將軍足利義満が室町通に面して「花御所」を造営した。このことは前代からの当地の政治的重要性を表すものと考えられ、以後従来からの公家邸宅にあわせ武家政権の邸宅が集中する上京は、名実ともに当時の日本政治の中心となった。

またその後室町時代後半から室町通の両側に商家の軒が連なるようになったと考えられ、「国立歴史民俗博物館甲本洛中洛外図屏風」、「上杉本洛中洛外図屏風」共に酒屋・土倉・油屋などが立ち並び賑う様子が描かれている。当時の町並みは「立売の辻」と呼ばれた立売室町を中心に発達し、「町組」と呼ばれる自治的都市運営を目的とした町々の連合組織が出現した。

本調査区は「立売の辻」を約一町南に下った「裏築地町」に含まれる場所にあたる。「裏築地町」は町組の中でもその初期にできた「立売組」に属する町の一つであり、その初見は天文18年（1549）、三好長慶の書状中にある「立売四町衆」にまで遡ることができ、この立売四町のうちの一つに「裏築地町」が含まれていたことが後世の註記より分かる。上京内の町組は天文19年（1550）に上京内の町同士の喧嘩を仲裁しており、その組織力は幕府にも認められていたようである。また1570年前後の上京の様子を、イエズス会の宣教師であるルイス・フロイスは「上の都は、日本全国の都にして、甚だ富みたる人居住し、（中略）上の都は下の都より大なること二倍なる」（『耶蘇会士日本通信』）と伝えている。

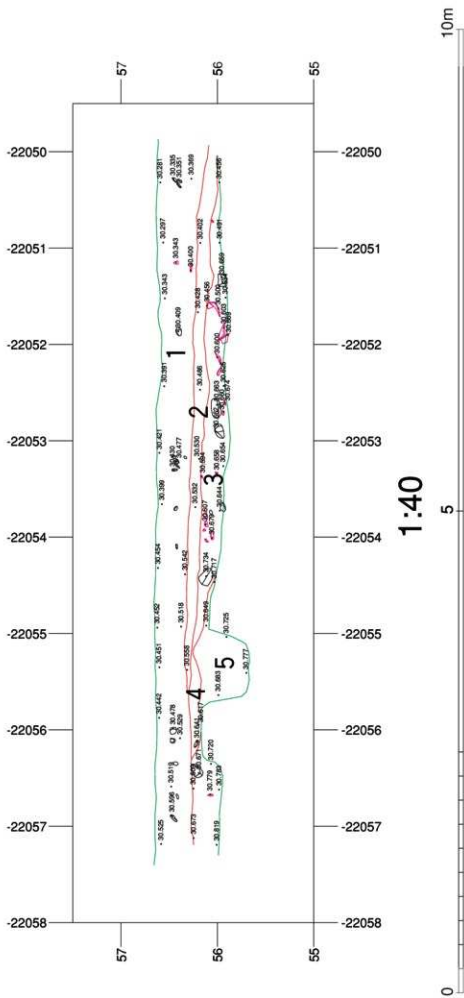
このように富裕層が集住する町として繁栄しつつあった上京地域は永禄11年（1568）将



図1 キャンパス位置図

軍足利義昭を奉じて上洛した織田信長からの圧力にも屈せず、上京衆は信長の建築した新邸の周壁を破壊するなど反信長の行動に出た。その結果元亀4年（1573）信長により上京焼討が行われ、焼失家屋は六千～七千軒にも及んだという。同年七月に復興命令が出され、上京は再建されることとなるが、復興後も当地域は富裕な商人達が居住する区域だったと思われ、「裏築地町」は天正16（1588）年の豊臣秀吉政権による建造物の改築費用に軒あたり105文という平均の約二倍の分担金を賄っている。町組は時代が進むとともに格差が生じてくるが、裏築地町は立売親組の一町として高い格式を誇った。

江戸時代初頭における本調査地は寛永十四年（1637）の『洛中絵図』によって当時の様子を詳細に確認することができる。これによれば「うら辻町」との書き込みがある室町通の東、聖護院の西側に位置した空虚地周辺となっており、引き続き町屋として活用されていたものと思われる。



1		攪乱層
2	10YR	シルト
3	10YR	シルト 焼土含む
4	7.5YR	焼土
4	10YR	砂

図3 基本層序

II 調査の成果

1 調査の方法

発掘調査は、新大会館の改築に伴うインフラ整備のため、その範囲に調査区を設定し、工事で掘削される深度まで調査を行った。

2 層序

本地点では、調査深度を約0.8mに設定した。そのため、地山は検出されなかった。基本層序は大学会館地点におけるこれまでの調査に準じ、上から順に、第1層・攪乱層（現代）、第2層（明治時代）、第3層（江戸時代後期）であり、第2層と第3層の間に火災とみられる焼土層が検出されている。今回は基本層序として、南地区18トレンチの土層断面（図3、写真1）を提示する。

3 遺構・遺物の概要

今回の調査は、大学会館地点南地区の追加調査として位置づけ、16～19トレンチの名称を付けて調査を行った。

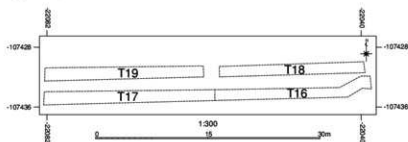


図4 トレンチ位置図

16トレンチ（写真2・3）は調査区の南東に位置する。江戸時代後期の面から石組（石組15）が検出され、18トレンチまで続いていることから、少なくとも長さ5mにわたる遺構であることがわかる。同じ面から17世紀代の土器を多く含んだ土坑（土坑488）、直径が約10cm程度の礫だまり（土坑489）が検出された。

17トレンチ（写真4・5）は調査区の南西に位置し、第2層から3層にかけてトレンチ東側に東西6mの石敷（石敷3）が検出された。この石敷の南北の長さは、トレンチ外にのびているので不明である。トレンチの西側は2層と3層の間に焼土層があり、その下から土器だまりとかまど状遺構が検出されている。土器だまりから出土した土師器皿は17世紀前半とみられる。かまど状遺構からは、17世紀前半とみられる土師器皿、瀬戸美濃系陶器が出土している。

18トレンチ（写真6・7）は調査区の北東に位置し、トレンチの西側約半分には、17世紀後半から18世紀にかけての瓦だまりが検出された。南側には16トレンチの石組15のつづきが検出されている。

19トレンチ（写真8）は調査区の北西に位置する。第2層上面から埋堯が2つ出土している（土坑517・525）。第3層及び第4層から瓦組遺構が検出された。町屋にともなう地下倉庫とみられ、17世紀後半から18世紀初頭の土器・陶器を多く含んでいる。

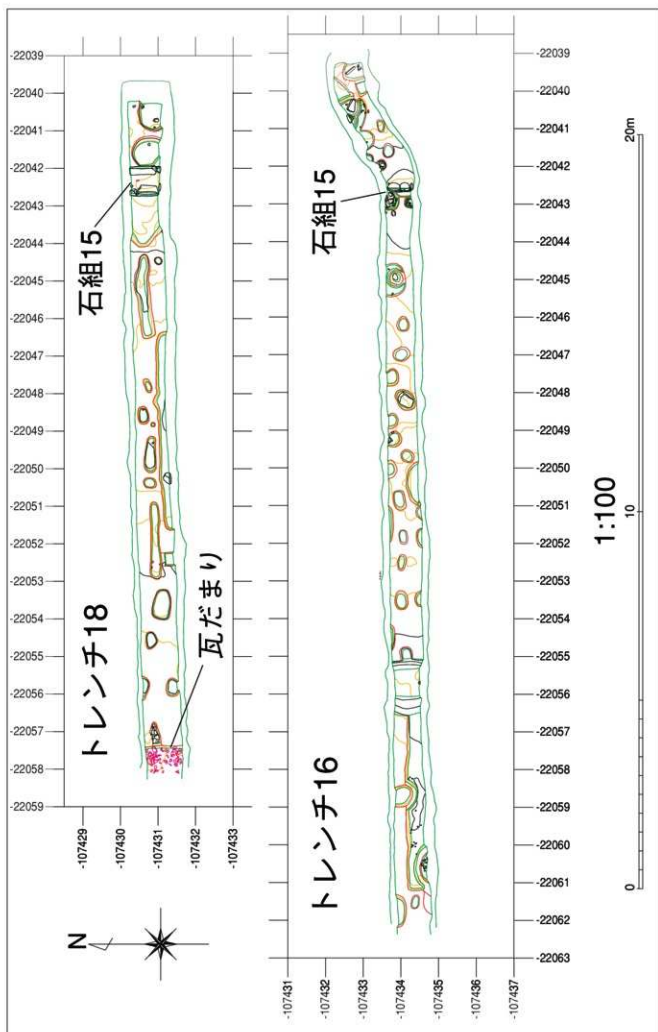


図5 調査区東側全体図 (第2層上面) 縮尺1/100

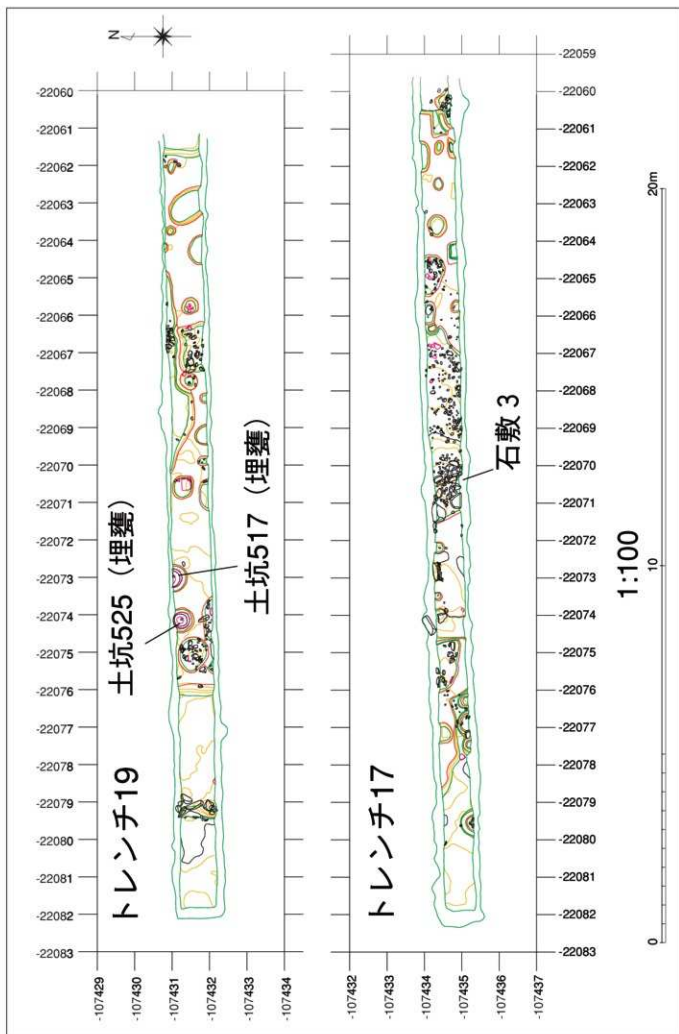


図6 調査区西側全体図(第2層上面) 縮尺1/100

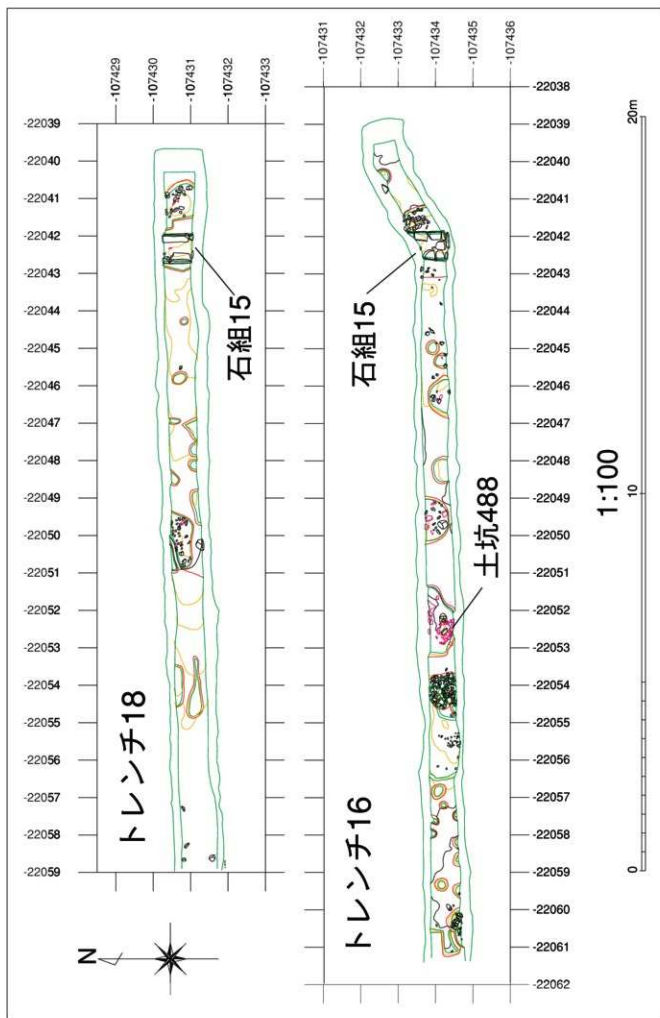


図7 調査区東側全体図(第3層上面) 縮尺1/100

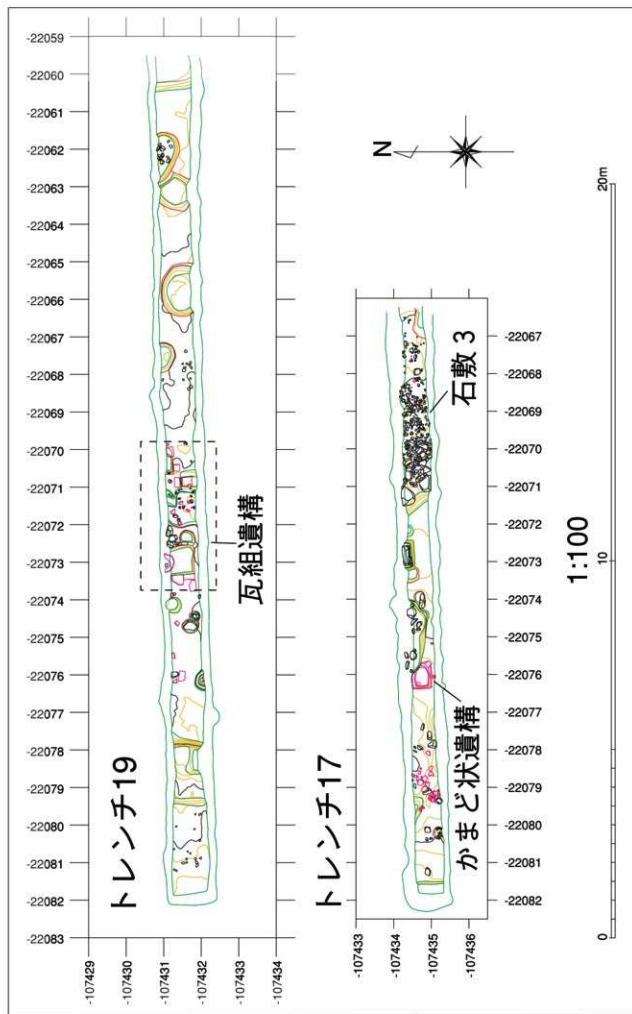


図8 調査区西側全体図（第3層上面）縮尺1/100

4 主な遺構と遺物

a 石組15 (図9・10、写真9)

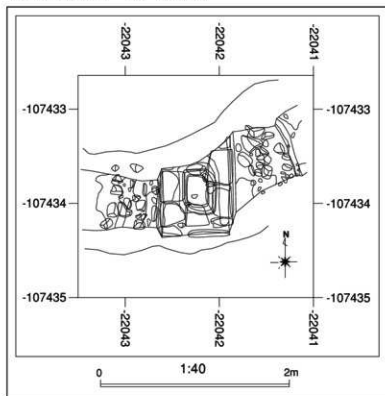


図9 石組15平面図 (縮尺1/50)

石組15はトレンチ16の第2層上面東側で検出され、規模は南北1m、東西2m、高さ0.5mである。堆積状況は攪乱層の下に炭の混じったシルトと粘土の層があり、その下に粘土層とシルトの層が重なっている。石組は大きいもので長軸35cm、短軸25cm、高さ10cm程度の石が四角形に配されている。

石組15からは土器、磁器、金属製品が出土している。

5729-2641は肥前系磁器の碗で、焼成は良好である。白地に呉須で文様が描かれる。体部は薄く、口縁にかけて緩やかに広がる。口径は9.0cm、現存部分の器高は3.2cmである。

b 土坑488 (図11・12、写真10)

土坑488はトレンチ16の第2層上面中央部に位置し、南北0.6m、東西2mの東西に長軸を持つ土坑である。全体の大きさはトレンチ外に伸びているため不明である。堆積は上層が砂及び礫とその下層のシルトの層からなっている。

土坑488からは土器、陶器、磁器が出土している。

5653-2612から5653-2633は土器器皿で、胎土はきめ細かく、焼成は良好で、いずれも体部から底部にかけてにナデによる調整が施される。内面底部には沈線が入っている。

5653-2612は外面腰部から体部にかけて内湾しながら立ち上がる。横ナデによる調整は施されていない。口径は12.3cm。器高は2.0cmである。

5825-2620は外面腰部から底部にかけて指押さえを受け、やや外湾しながら立ち上がる。口縁部付近は横ナデによる調整が施され、厚みを増してやや上方に広がる。口径は11.6cm、器高は1.9cmである。

5657-2628は底部両面に指押さえが施され、腰部から体部にかけて緩やかに立ち上がる。口縁部は横ナデによる調整をうけ、わずかに内湾する。口径は11.9cm、器高は1.5cmである。

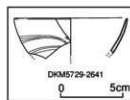


図10 石組15出土遺物
実測図 (縮尺1/3)

5653-2633の胎土はきめ細かく、焼成は良好である。外面腰部に強い指押さえをうけ外湾し立ち上がる。口縁部は横ナデのあとが見られる。口径は11.8cm、器高は1.5cmである。

c かまど状遺構 (図13・14・写真11)

トレンチ17の焼土層の下、中央やや西側、東西0.75m、南北0.5m、深さ0.28mのかまど状遺構が検出された。遺構の大きさはトレンチの外に広がっているため不明である。

かまど状遺構の周辺からは土器、陶器、磁器が出土している。

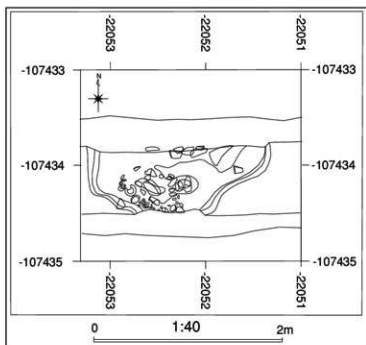


図11 土坑488平面図 (縮尺1/40)

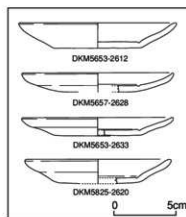


図12 土坑488出土遺物実測図 (縮尺1/3)

5821-2510から5821-2565の三点は瀬戸美濃系陶器の丸碗である。いずれも轆轤形成されており、高台は削り出し高台である。

5821-2510は胎土はきめ細かく、焼成は良好である。灰白色の釉薬がかけられている。体部中央で内湾し、ゆるやかに広がり口縁部に至る。内面底部に胎土目積の痕が見られる。口径10cm、高台径は4cm、器高は5.2cmである。

5821-2511 (写真17) は胎土はきめ細かく、焼成は良好である。灰白色の釉薬がかけられる。腰部はやや張り気味に立ち上がり、口縁部付近でわずかに外湾したのち内湾する。口径は10.4cm、高台径は4.4cm、器高は5.4cmである。

5821-2565は胎土はきめ細かく、焼成は良好である。灰白色の釉薬がかけられている。体部中央付近で外湾した後、直線的に広がる。口径は9.8cm、高台径は4cm、器高は5cmである。以上三点はいずれも16世紀末から17世紀初めにかけて瀬戸・美濃地方で生産された可能性が高いと考えられる。

5902-2547 (写真18) は肥前系陶器の碗で、胎土は小石混じりで粗く、焼成は良好である。灰オリーブの釉薬がかけられる。腰部はやや張りながら立ち上がり、直線的に広がる。口径9cm、高台径3.9cm、器高4.1cmである。

5821-2527は瀬戸美濃系丸皿で、胎土はきめ細かく、焼成は良好である。高台は削り出し高台である。内面底部に胎土目積の痕が見られる。口径は11.7cm、高台径は6.4cm、器高は2.4cm、である。

5899-2540は土師器皿で、胎土はきめ細かく、焼成は良好、体部の半分強が黒く焼けてい

る。口縁部には煤の付着も見られる。体部全体にナデによる調整が施され、内面底部には極弱い沈線が入る。口縁部はやや広がる。口径は11.6cm、器高は2.2cmである。

d 土器だまり (図15・16、写真12)

トレンチ17西側の土器だまりは、東西約1.5m南北0.75mの範囲に土器が散在する遺構である。かまど状遺構と同様に、焼土層の下から検出された。

土器だまりからは土器、陶器、青磁の香炉などが出土している。

5804-2531は脚付きの青磁の香炉である。焼成は良好である。外面体部下方に脚が三つある。口径は7.2cm、器高は5.3cm、高台径は4.2cmである。

5806-2552 (写真19) は肥前系磁器の碗である。焼成は良好、白地に呉須で菊唐草文や壺などの文様が描かれる。腰部は張り気味で、口縁部には輪花装飾と呼ばれる装飾が施される。口径は9.0cm、器高は5.3cm、高台径は3.6cmである。

5812-2541は土師器皿で、胎土はきめ細かく、焼成は良好である。外面体部は押さえをうけて外湾しながら立ち上がり、口縁部はややひろがる。内面底部には弱い沈線が入る。口径は11.4cm、器高は2.2cmである。

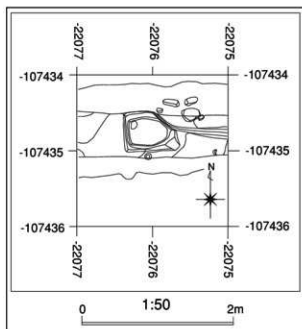


図13 かまど状遺構平面図 (縮尺1/50)

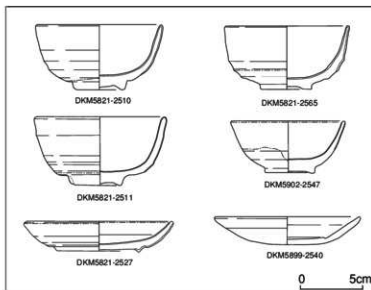


図14 かまど状遺構出土遺物 (縮尺1/3)

e 石敷3 (図17・18、写真13)

トレンチ17中央部、第2層から第3層にかけて、東西2mの石敷3が検出された。南北の長さはトレンチ外にのびているので不明である。直径20cm程度の隙の間を埋めるようにこぶし大の礫を敷きつめている。

石敷3からは土器および磁器が出土している。

5734-2636は筒形碗と思われる肥前系磁器である。焼成は良好である。白地に呉須で文様が描かれる。高台は非常に低く、削り出して成形されている。高台径は4.8cm、残存高は1.1cm

である。

5734-2662は肥前系磁器の碗である。焼成は良好である。白地に呉須の明るい文様が描かれる。口径は11.2cm、高台径は4.4cm、器高は5.1cmである。

f 瓦だまり (図19・20、写真14)

瓦だまりは、第2層から第3層にかけてトレンチ18の西端からのびており、トレンチ内では東西の長さ約8mが検出されている。全体の範囲はトレンチ外に伸びているため不明である。瓦は西側と東側の二箇所に分布しており、とくに西部の密集度が高い。

瓦だまりからは白磁・染付等の磁器、陶器、土器、瓦が出土している。

6153-2566は器種不明の土器である。分銅のような形状をなしている。胎土はきめ細かく、焼成は良好である。最大径は3.2cm、器高は3.3cm。

6262-2573は焼塩壺の蓋で、胎土はやや粗く、焼成は良好である。最大径は5.2cm、器高は2cm。

6216-2616は信楽焼と思われる陶器である。器種は深皿か碗と思われる。胎土はきめ細かく、焼成は良好である。乳白色の釉薬がかけられる。内面底部に輪状の隆起が見られる。腰部からやや急に立ち上がる。残存部分の最大径は15.3cm、器高は3.3cmである。

6141-2635は瀬戸美濃系陶器の壺の一部と思われる。胎土はきめ細かく、焼成は良好である。黒褐色の釉薬がかけられる。口縁部は玉状に成形される。口径は7.6cm、残存部分の器高は2.6cm、最大幅は8.6cmである。

6262-2615は肥前系磁器の盤と思われる。焼成は良好である。赤みの混じった灰色の胎土に、呉須でやや濃い文様が描かれる。釉薬は腰部外面までかかり、高台内面及び高台付近は胎土が露出する。高台径は8.8cm、残存部分の器高は1.6cmである。

6252-2574は国産の白磁と思われる碗である。焼成は良好である。腰部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がり直線的に広がる。高台は細く削りだされている。口径は11.6cm、器高は5.9cm、高台径は4.8cmである。

6141-2600は肥前系磁器の皿である。焼成は良

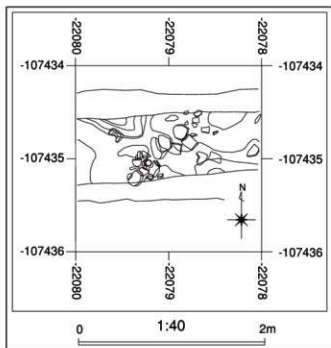


図15 土器だまり平面図 (縮尺1/40)

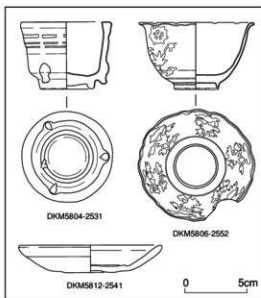


図16 土器だまり出土遺物 (縮尺1/3)

好である。灰白の胎土に呉須で暗めの模様が描かれる。外面体部にやや広い範囲にわたって砂の付着がある。口径は10.6cm、残存高は2.1cmである。

6119-2619 (写真20) は肥前系磁器の筒形碗である。焼成は良好である。外面口縁部付近に呉須で文様が描かれ、外面体部には赤褐色の文様が描かれる。高台は削り出し高台で、腰部からほぼ垂直に立ち上がる。口径は5.1cm、高台径は7cm、器高は7.4cmである。

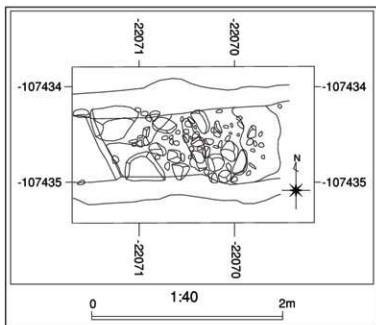


図17 石数3平面図 (縮尺1/40)

g 瓦組遺構1 (図21・22・23、写真15・16)

トレンチ19のほぼ中央に、東西方向に約4m、南北はトレンチ外に伸びていて不明、深さ0.65mの瓦組遺構が検出された。長軸約30cm、短軸約25cm、厚さ約3cmの瓦が埋土と交互に重なって層状になっている。

瓦組遺構1からは土器、土器、陶器、瓦が出土している。

6381-2501から

5889-2563の7点は土師器の小皿である。

6381-2501は、胎土はきめ細かく、焼成は良好である。体部から口縁部にかけてやや内湾しながら立ち上がる。口径は5.6cm、器高は1.3cmである。

5883-2544は、胎土はきめ細かく、焼成は良好。やや浅めの小皿で、体部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がる。口径は5.2cm、器高は1.1cmである。

5887-2546は、胎土はきめ細かく、焼成は良好である。浅めの小皿で体部は内湾しながら立ち上がる。口径5.6cm、器高1.3cmである。

6391-2553は、胎土はきめ細かく、焼成は良好である。深めの小皿で腰部から体部にかけて急に立ち上がる。口径は5.8cm、器高は1.8cmである。

5875-2558は、胎土はきめ細かく、焼成は良好である。底部から体部にかけて緩やかに立ち上がる。口径は5.5cm、器高は1.8cmである。

5862-2560は、胎土はきめ細かく、焼成は良好である。口径は5.0cm、器高は1.3cmである。底部から体部にかけて緩やかに立ち上がる。

5889-2563は、胎土はきめ細かく、焼成は良好である。全体に厚く、腰部はやや張り気味

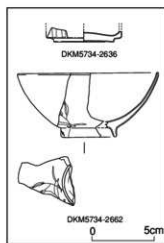


図18 石数3出土遺物実測図 (縮尺1/3)

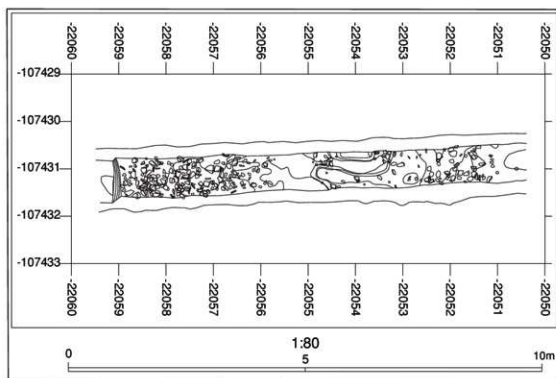


図19 瓦だまり平面図 (縮尺1/80)

である。口径は5.3cm、器高は1.4cmである。

6361-2507から5854-2556までの7点は土師器皿である。

6361-2507は胎土の一部に小石が混じる。焼成は良好である。全体にナデ調整、口縁部には横ナデ、底部から腰部にかけては指押さえの痕が見られる。腰部は強い指押さえをうけて、強く内湾し、内面底部には軽い沈線が見られる。口径は12cm、器高は2.2cmである。

6382-2514の胎土はきめ細かく、焼成は良好である。全体にナデ調整が施され、口縁部は横ナデによる調整が施される。底部から体部にかけて指押さえをうけ、腰部は軽く内湾しながら立ち上がる。内面底部に弱い沈線が見られ、体部は短い。口径6.1cm、器高1.9cmである。

5858-2537の胎土はややあらく、焼成は良好である。全体にナデによる調整が施され、口縁部には弱い横ナデによる調整の痕がみられる。底部、腰部に指押さえを受け、大きく内湾しながら立ち上がる。底部内面には弱い沈線が見られる。口径は10.5cm、器高は1.6cmである。

5846-2538は胎土に小石が混じり、やや粗く、焼成は良好である。口縁部には煤の付着がある。全体にナデ調整、口縁部には横ナデによる調整、底部には指押さえ、内面底部には沈線が見られる。体部は緩やかに立ち上がる。口径は11.7cm、器高2.4cmである。

6331-2539は胎土に小石が混じり、焼成は良好である。全体にナデによる調整が施され、口縁部には強い横ナデによる調整の痕跡が見られる。底部には指押さえがある。体部はやや短く、緩やかに立ち上がる。内面底部に沈線が確認できる。口径は12.4cm、器高1.9cmである。

5873-2551は胎土に小石が混じり、焼成は良好である。口縁部は指押さえを受けて強く内

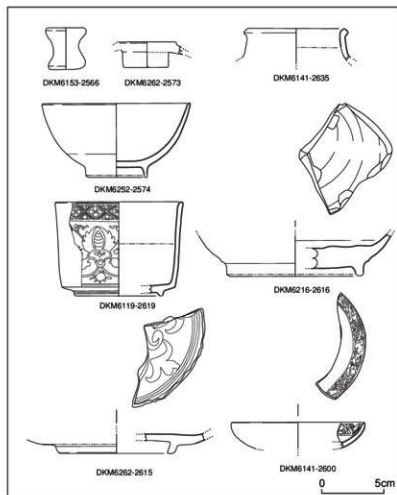


図20 瓦だまり出土遺物実測図 (縮尺1/3)

湾し、内面底部に弱い沈線が見られる。口縁部には弱い横ナデによる調整が施され、底部には指押さえの痕が見られる。口径は11.5cm、器高2cmである。

5854-2556は胎土に小石が混じり、焼成は良好である。口縁部は横ナデによる調整を受ける。底部両面に指押さえによる調整が施され、内面底部には弱い沈線が入る。体部は強く内湾し立ち上がる。口径は10.6cm、器高1.9cmである。

6362-2502は肥前系と思われる京焼系陶器の皿である。胎土はやや小石が混じり、焼成は良好である。削り出し高台である。体部外面には文様が確認できる。高台径は3cm、現存する部分の器高は1.7cmである。

5845-2579 (写真21)は肥前系陶器の鉢と思われる。胎土はきめ細かく、焼成は良好である。内面には刷毛目による文様が見られる。体部外面に轆轤による調整の痕と思われる浅く細い輪状の溝が見られる。高台は削り出して成形されており、また、高台周辺には砂目積によるものかは判断がつかないが、やや広い範囲にわたって薄い砂の付着がある。高台径は8.4cm、残存高は5.1cmである。

5863-2582 (写真22)は肥前系陶器の碗と思われる。体部内面、外面両方に刷毛目による文様が見られる。高台は丁寧削り出して成形される。胎土はきめ細かく、焼成は良好である。高台径は3.6cm、残存高は2.6cmである。

6362-2594は瀬戸美濃系陶器の

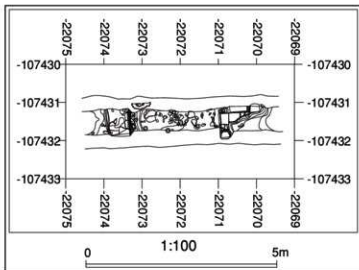


図21 瓦組遺構平面図 (縮尺1/100)

蓋である。胎土はきめ細かく、焼成は良好で、体部外面に黒褐色系の釉薬がかけられる。最大径は9.8cm、器高は2.8cmである。

5882-2607(写真23)は京焼系陶器の碗と思われる。小石混じりの灰白色の胎土に黄灰色の釉がかけられ、植物を模したと思われる朱色と淡い緑色の文様が描かれる。口径は9.6cm、残存高は4.5cmである。

6390-2610は機種不明の肥前系陶器である。体部内面に刷毛目による文様があり、体部外面には波状の細く浅い溝が見られる。胎土はきめ細かく、焼成は良好である。口縁部は削

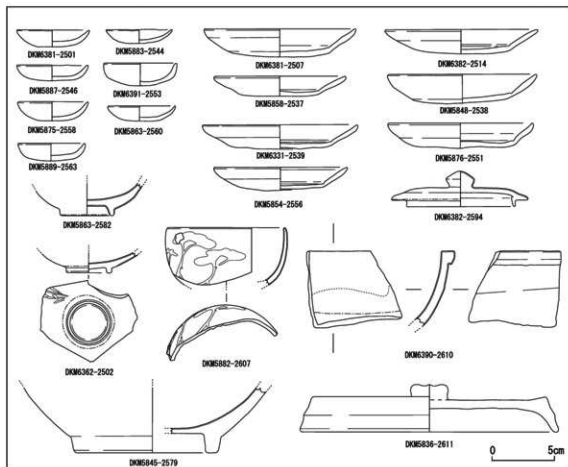


図22 瓦組遺構出土遺物実測図1(縮尺1/3)

り出されている。口径は不明、残存部分の器高は5.9cmである。

5839-2611は土師器の蓋である。胎土はきめ細かく、焼成は良好である。轆轤成形がなされ、蓋部上面にはナデによる調整の痕が見られ、つまみの付け根付近には、つまみを取り付けたときのものと思われるナデの痕が確認できる。内面にも轆轤成形によるナデの跡が見られる。体部は、二段に渡って横ナデがされた後に指押さえによる調整が行われたと思われる。最大径は20.4cm、器高は3.6cm。

6390-2642(写真24)は肥前系陶器の筒形碗と思われる。胎土はきめ細かく、焼成は良好である。底部から内湾しながら立ち上がり、底部より2cm上方に幅1cmの浅い溝が彫り込まれる。最大径は6.6cm、現存部分の器高は4.3cmである。

5888-2646は朶衣壺と思われる土器である。胎土は小石混じりでやや粗く、焼成は良好で

ある。轆轤形成によるものと思われる横ナアの痕がある。残存する部分の最大径は19.4cm、残存高は4.5cmである。

6391-2647は瀬戸美濃系の陶器で、志野の向付と思われる。胎土は小石が混じり、焼成は良好である。口縁部下2cm付近で垂直に立ち上がり、軽く外湾し口縁に至る。口径は14cm、残存高は3cmである。

6380-2649（写真25）は肥前系陶器の大皿と思われる。胎土はきめ細かく、焼成は良好である。三鳥手と呼ばれる文様が描かれている。体部外面に轆轤による調整の痕と思われる

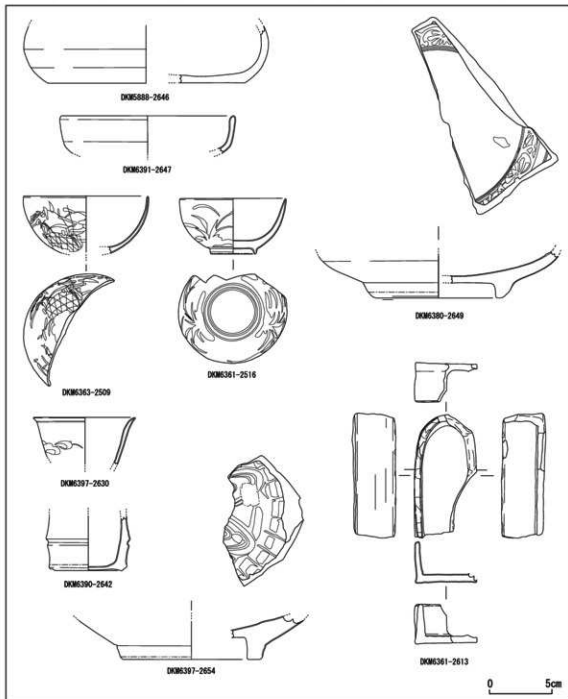


図23 瓦組遺構出土遺物実測図2（縮尺1/3）

浅く細い輪状の溝が見られる。高台は削り出し形成である。高台径は9cm、最大径は残存高は3.7cmである。

6397-2654 (写真26) は肥前系陶器の馬の目皿と思われる。胎土はきめ細かく、焼成は良好である。高台はやや粗く削り出されている。内面底部には目積の痕と思われる痕跡が確認できる。高台径は11cm、残存高は3.4cmである。

6363-2509は肥前系磁器の碗である。焼成は良好で、白地に呉須でうすく文様が描かれている。体部は薄手で、緩やかに立ち上がり口縁部付近はほぼ垂直に伸びる。口径は9.6cm、残存高は4.5cmである。

6361-2516 (写真27) は肥前系磁器碗である。焼成は良好で、白地に呉須で文様が描かれている。やや小ぶりの碗で、高台は削り出して成形されている。全体に厚手で、体部から緩やかに立ち上がる。口径は8.4cm、器高は4.4cmである。

6397-2630は肥前系磁器の碗と思われる。焼成は良好である。白地に呉須で文様が描かる。口縁部付近で一度厚くなったのち、内湾し外に広がる。口径は8.2cm、残存高は3.6cmである。

6361-2613 (写真28) は京焼系の饗皿である。胎土は小石混じりでやや粗く、焼成は良好である。全体に黄橙色の釉薬がかけられる。楕円形の器形で、体部は垂直に立ち上がる。口縁部には緑色の釉薬が斑点状にかけられる。器高は2.1cmである。底部の幅は横が5cm、縦は不明である。

5 主な遺物

a 土器・陶磁器 (図24)

5937-2581 (写真29) はトレンチ16の第3層精査時に出土した産地不明、機種不明の陶器である。胎土はきめ細かく、焼成は良好である。底部から腰部にかけて低く立ち上がり、腰部から体部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。口縁部は削り出され、口縁から内面にかけて、赤みのかかった胎土に灰オリーブ色の釉薬がかけられる。口径は11.6cm、器高は2.9cmである。

5693-2524 (写真30) はトレンチ17の第2層から第3層上面西側で出土した。信楽焼の皿と思われる。胎土はきめ細かく、焼成は良好である。体部内面に六本の櫛状の刻み目が交差して入る。腰部から底部にかけては胎土が露出し、轆轤形成によるナデの痕跡を確認できる。口径は12.5cm、器高は2.3cmである。

6359-2580 (写真31) は、トレンチ19第4層上面出土の京焼系の碗である。胎土はきめ細かく、焼成は良好である。四角く成形され、緩やかに内湾する。内面上方から外面腰部にかけて黄灰色の釉薬がかけられ、外面体部には梅と思われる

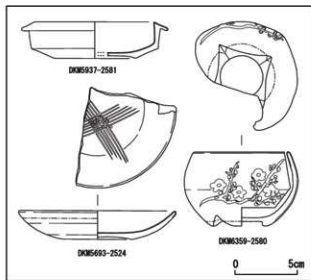


図24 主な遺物実測図 (縮尺1/3)

文様が描かれる。削り出し高台で、高台の四隅は削り取られている。口径は7.4cm、最大径は9cm、器高は5.9cmである。

b 金属製品（写真32）

トレンチ17第3層の焼土からは、大中小3種類の分銅が出土しており、いずれも青い錆が付着している。

大の長さは約3.2cm、厚さ約1.5cm、重さ約75gである。中の長さは約2.6cm、厚さ約1.2cm、重さ約40gである。小の長さは約2.1cm、厚さ約1.0cm、重さ約20gで、「五匁」と読める文字が刻まれている。五匁は約18.75gなので、付着している錆の重さをふまえると五匁の分銅としてよいと考えられる。

Ⅲ まとめ

今回の調査は、寒梅館へ誘導する配管工事の計画によった。したがって調査の面積と深度を最小限にとどめるべく、深度は0.8mと設計され、面積も配管施工に必要な最小限のものとした。また、配管工事の設計を工夫することで、検出された遺構の可能な限りの保存もおこなうことにした。よって、掘削深度のおよばない中世以前の遺構面は未調査のまま存置されている。

また、狭い面積の調査による遺跡理解の誤謬を避けるため、調査の対象となった江戸時代についても、保存可能な部分については下層の調査を避けたため、調査面が不連続となり、全体として統一した遺構面の掌握ができていない傾向がある。これはあくまで遺跡の総合的な理解を尊重したものであり、その旨の了解をいただきたい。

調査によって確認された生活面は2面であり、それぞれ第2層上面が18世紀代、第3層上面が17世紀代と推定される。

第2層上面では調査区の東端（16・18トレンチ）から東西両側に面をもった南北方向の石積が発見された。東西の幅は約0.6mで、南北は調査区の範囲を越えてのびている。石材は切石の花崗岩で東西の石列に挟まれた中間部は、礫と土が充填されている。一部には一定の間隔で礫を集中されているように見える部分もある。これらの特徴は、中央に支柱を立てて構築された築地塀の基礎と考えられる。また上層を近代の整地土が覆っているため、明治に入り廃棄されたと考えられる。

一方調査区の西部（17・19トレンチ）からは埋壙と礎石を伴った石敷きが発見された。19トレンチの埋壙は東西方向に2つ並んでおかれており、いわゆる便所壙に該当する。17トレンチの礎石はやはり東西を軸として2石が並び、東の礎石の南にはそれに続くともみられる礎石が置かれ、その東が石敷きとなっている。一般に石敷きは蔵の基礎と考えられることが多いが、これらの礎石と関係するならば、その可能性は高いことになる。

第3層上面の遺構は、調査区の東端（16・18トレンチ）から第2層上面と同様に築地塀基礎がみえ、さらに築造時の掘方と思われる遺構も確認された。構築時期が江戸時代初期に遡る可能性がある。

一方調査区の西部では、19トレンチの第2層上面でみつかった埋壙の下から、瓦積の地下蔵が発見された。本学では、同様な遺構は女子大図書館地点の調査でみつかったているが、平瓦を積んで壁を構築した大型の遺構である。確認された部分は東西の壁の一部であるが、掘方を含めた東西の規模は4m、内法で2.3mを測る。さらに、東壁はその北端が階段状に成形されており、西壁はその南がさらに西へ拡張されていることがわかる。一般家庭に伴う地下蔵とは考えにくい状況である。

17トレンチでは、第2層上面でみつかった礎石および石敷きの西部下層から、焼土層および焼土面が検出され、その一角からかまど状の遺構と多彩な遺物が出土した。またかまど状遺構の南西からは、焼けて炭化した桶が据えられた状態で検出された。

出土遺物の中で最も注目されるのは3つの分銅である。そのうちのひとつには「五匁」と読める文字が刻まれており、この調査地点が商家に関係する可能性を示している。なお、かまど状遺構の周辺から志野碗および肥前系陶器碗が出土しており、時期の一点を17世紀前半におくことができる。

以上、本調査区における主要な遺跡情報についてみてきたが、ポイントは調査区東部の

石積みと調査区西部の遺構群に絞られることがわかる。

ところで、今回の調査にかかわる文献史料をひけば、本調査区の位置は、上京の中心地として『言継卿記』の大永8年(1528)1月13日の記事に現れる「たちうり」(室町立売)に隣接する一帯で、『嚴助往年記』の弘治3年(1557)4月28日の大火では「立売町已下、四百間余焼失」と記されたような繁華街だった。さらに天文18年(1549)には、その7年前に、その東部に室町殿が再建される中、上京町組が成立する(木下政雄「京都における町組の地域発展」)など、上京の中でも最も由緒のある町共同体だったと言えるだろう。

本調査区の西部で発見された瓦積み遺構、蔵の基礎と推定される礎石と石敷きおよび茶陶と分銅は、このような室町時代後半に成立した立売の町家の、中でも裕福な商家の存在を裏付けるものとして注目されるよう。

また本調査区の東端でみつかった石積みについては、寛永14年(1637)の「洛中絵図」が参考になる。絵図によれば、本調査区は「うら徒ち町」と呼ばれ、その東に「聖護院」が広い敷地を占めている。

聖護院は、智証大師円珍の草創になる天台寺門宗の門跡寺院で、増誉が寛治4年(1090)の白河上皇熊野詣に際し先達として活躍したことによって、修験道統括の法務を営むために創した白川院が直接の起りりとされている。ほぼ現在と同じ場所にあったが、応仁の乱で焼失したため岩倉長谷に移り、室町時代後半は足利義政との関わりの中で本格的な整備がすすめられることになる。「洛中絵図」に描かれている聖護院は、豊臣秀吉が岩倉から移した後の姿であり、現在の場所への移転は、元和6年(1620)の上京大火などを経た延宝4年(1676)になっている。

今回みつかった南北軸の石積みは、その位置が「洛中絵図」に描かれた聖護院の西の敷地境界に一致するものであり、さらに石積みに火災を受けた痕跡が見られないため、元和6年以降の築造によるものと考えられる。近世の築地塀基礎は、京都御所内の調査が知られているが、対比できる資料とならう。

なお、今回の調査で確認された江戸時代前期面の下には厚い整地層があり、中世末期において一帯に大規模な造成のおこなわれたことがわかる。深度が安全掘削の限界を越えたために確認はしていないが、中世の上京がその下に眠っていることは確実である。今後おこなわれる周辺の調査が注目される。

抄 録		
所収遺跡名	室町殿跡（旧大学会館地点）第3期調査	
所在地	京都府京都市上京区御所八幡町・裏築地町	
コ ー ド	市町村番号 26100	
	遺跡番号 230	
北 緯	35° 01' 52"	
東 経	138° 15' 29"	
調査期間	2003年8月1日～9月5日（延25日）	
調査面積	90㎡	
調査原因	寒梅館の建築	
種 別	都市遺跡	
主な時代	江戸時代	石組・瓦組遺構・かまど
主な遺物	近世土器・陶磁器	
	金属製品	分銅

はじめに（谷口浩史、松本尚子）

I 調査の経緯（竹井良介）

II 調査の成果

- 1, 2, 3（松本）
- 4, 遺構（中村尋）
遺物（谷口）
- 5, 土器・陶磁器（谷口）
金属製品（松本）

まとめ（勳柄俊夫）

本報告で用いた図のうちキャンパス位置図、調査地点周辺図、トレンチ配置図、遺物実測図は、アドビシステム株式会社のAdobe Illustrator10 日本語版を使用し製図を行った。遺構図は、株式会社アジア航測が作成した原因を一部改変し、使用した。遺構図の座標はmを単位とし、-107で始まる数値が南北、-22で始まる数値が東西を示し、図中の数値および立面・断面の横軸は標高を示している。なお、本報告で用いた土色は小山正忠・竹原秀雄「新版 標準土色帖2001年度版」を元に行っている。

本報告に掲載した出土遺物の実測・製図については、本学学生が中心となって行った。写真撮影については渡部和孝が行った。本報告の編集は勳柄俊夫の監修のもと、谷口浩史、松本尚子が行った。



1 18トレンチ中央部北壁断面



2 16トレンチ第2層全景 (西から)



3 16トレンチ第3層全景 (西から)



4 17トレンチ第2層全景 (東から)



5 17トレンチ第2～3層西側上面 (東から)



6 18トレンチ第2層全景 (西から)



7 18トレンチ第3層全景 (西から)



8 19トレンチ第4層上面全景 (東から)



9 16トレンチ石組15 (北から)



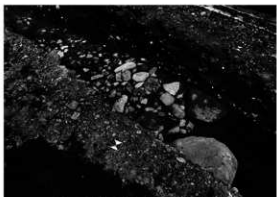
10 16トレンチ土坑488 (南から)



11 17トレンチ焼け面かまど (北から)



12 17トレンチ土器だまり (北から)



13 17トレンチ石敷3 (北東から)



14 18トレンチ瓦だまり (西から)



15 19トレンチ瓦組遺構上面 (南から)



16 19トレンチ瓦組遺構東壁



17 かまど状遺構 瀬戸美濃系 丸碗 DKM5821-2511



18 かまど状遺構 肥前系陶器 碗 DKM5902-2547



19 土器だまり 肥前系磁器 染付碗 DKM5806-2552



20 瓦だまり 肥前系磁器 染付碗 DKM6119-2619



21 瓦組遺構 肥前系陶器 鉢 DKM5825-2579



22 瓦組遺構 肥前系陶器 碗 DKM5863-2582



23 瓦組遺構 京焼系陶器 碗 DKM5882-2607



24 瓦組遺構 肥前系陶器 筒形碗 DKM6390-2642



25 瓦組遺構 肥前系陶器 大皿 DKM6380-2649



26 瓦組遺構 肥前系陶器 皿 DKM6397-2654



27 瓦組遺構 肥前系磁器 碗 DKM6361-2516



28 瓦組遺構 京焼系陶器 餐盤 DKM6361-2613



29 T17 第3層結合時 不明 DKM5837-2581



30 T17 第3層上面西側 信楽系陶器 皿 DKM5836-2524



31 T19第4層 京焼系陶器 DKM6359-2580



32 17トレンチ第3層 分銅

「伊勢守」屋敷跡・相国寺旧境内（図書館西地点）の発掘調査

調査位置：京都市上京区烏丸今出川上ル東玄武町

調査原因：同志社大学コジェネレーション施設建設

調査面積：85㎡

調査期間：2006年2月27日～3月31日

1. 調査地点について

当調査区は、烏丸今出川交差点の北東部の位置にある。京都市教育委員会によって「相国寺旧境内」という名称で周知の遺跡として登録されている地点内に相当する。文献を紐解くと、中世末／戦国期の京都の景観を描いたとされる上杉家本「洛中洛外図屏風」には、「伊勢守」の居宅としての描写がなされている区画にあたる。室町・戦国時代の伊勢氏の屋敷地として機能していた可能性が高い（黒田絏一郎「中世都市京都の研究」・山田邦和「戦国期上京の復元」『考古学に学ぶ（Ⅱ）』）。また、それより後に描かれた洛中の絵図類をもとにした考察からは、安土桃山時代には町屋へと変貌し、その後江戸時代には公家屋敷地帯の一角となっていたようである（京都市編『京都の歴史4 桃山の開花』）。

近接した地点での発掘調査としては、当調査区に東接した位置で1970年代に同志社大学図書館建設に先立つ調査が行われている。ここでは、近世の井戸などの生活遺構が検出されている。また、南接する地点では、地下鉄烏丸線今出川駅の昇降口建設に伴う調査が行われており、ここでは、近世の遺構群とともにその下層に14世紀の遺物を含む生活層が確認されている。いずれの調査についても、この地点の土地利用変遷の詳細は不明であるが、その成果からは、当調査区での中世遺構群の検出が期待された。



図1 調査地点
〔京都市道跡台帳〕2003に加筆

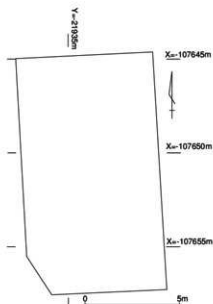


図2 調査区平面図

今回の調査は、同志社大学内の省エネルギー関連施設の設置に先立って行われたが、面積は80～90㎡と大きくない。しかし、近世の遺構群のみならず、15世紀に遡る可能性のある遺構・遺物も検出された。既往の近接地点の成果から期待された調査成果が、実際に確認されたことになる。

2. 基本層序

地表面から約1.4mまでの深さは、現代のコンクリートブロック・煉瓦片を含む攪乱土であった。しかし、その攪乱土中には、多量の近世土器・瓦片が含まれていた。近世に形成された遺物包含層を攪乱して形成された層と考えられる。その直下には0.4m程度の厚さで、近世の土師器・陶磁器・瓦片を多量に含む1層が形成されている。暗灰褐色を呈し、礫まじりの極細粒砂を基本とする土質である。1層下面では、多数の土坑が検出されている。いずれの遺構埋土からも、近世前～後期の土師器・陶磁器・瓦片が出土している。

また、1層直下に厚さ0.4～0.5m程度にわたって形成された2層は、褐色の粗粒砂まじり細粒砂を基調とした土質であった。2層中には、近世の陶磁器類の破片がほとんど混じらず、15～16世紀の土師器皿片が認められた。おそらく2層形成の中心時期は中世後半～戦国期に遡る可能性が高い。実際に、2層下面から検出された遺構群からは、同時期の土器・瓦片が多量に出土している。上述のように、南接する地点の地下鉄今出川駅出入口に関わる調査では中世後半の土器群が出土しているが、当調査区にも明確な当該期の遺物包含層と遺構が検出されたことになる。

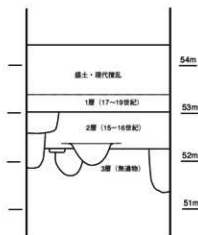


図3 基本層序模式図（数字は標高）

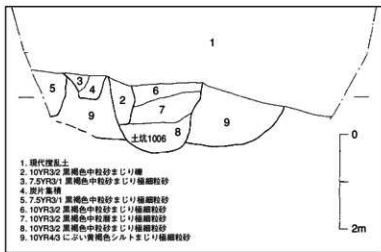


図4 調査区北壁土層断面図 (S=1/80)

2層直下の3層は、まったくの無遺物の堆積層であった。上部は黄褐色シルト、それ以下は礫層であり、扇状地環境での自然堆積のまままったく擾乱を受けず、暗色化・土壌化の進行もみられない堆積物である。今回の調査では、地表面から2.3mより下位の層位面については、建設による破壊を受けなため調査は行っていない。しかし、溝状遺構壁面での基盤層観察は試みたがそこでも、地表下3.2m程度の堆積層までは人的活動の痕跡は取できなかった。

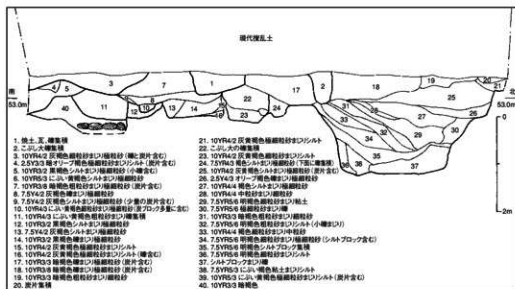


図5 調査区西壁土層断面図 (S=1/80)

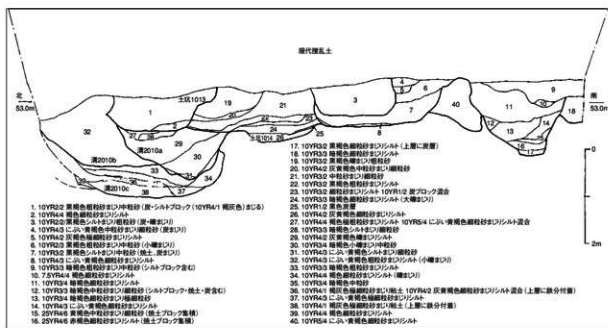


図6 調査区東壁土層断面図 (S=1/80)

3. 遺構

3.1 第1面・江戸時代～近現代

1層下面に相当する第1遺構面では、多数の近世の土坑群が検出された。一方、近・現代の煉瓦造施設も確認された。

煉瓦造り施設は、長辺約5m・短辺約2.5mの南北に長い長方形の平面形態であった。内部は、南辺から約1mの部分が東西方向に壁で仕切られていた。外壁や仕切り壁のいずれも、煉瓦を2列に積んで内面がモルタルで塗り固められていた。地表下約1.5mの地点で検出されていたため、地下施設の一部と考えられるが、用途は不明である。小規模なため焼却炉の下部施設もしくは便槽の可能性が想定される。煉瓦には刻印はなく粗雑なつくりで、明治期のものとは考えにくい。煉瓦のサイズは幅10cm・長さ20cm・厚さ5cmで、これは大正年間にできた規格基準に一致する。このため、この煉瓦施設の敷設は、1920年代以後ということは確実である。

から考えると1930～1940年代のものと推定される。1952年に烏丸今出川交差点の北東角が同志社大学の敷地となって以後は、当調査地点には一度も構造物が建築されたことはなく、戦後の本学施設の痕跡とは考えられない。それ以前は1940年代後半にGHQによる接収されていた敷地にあたる。接収された1945年以前は、旧閑院官家の旧宅が移築された木造建物がおかれ華族会館として使われていた。煉瓦造施設は、この華族会館時もしくはGHQ接収時に作られたものと考えられるが、詳細は不明である。



写真1 第1遺構面検出の煉瓦積施設

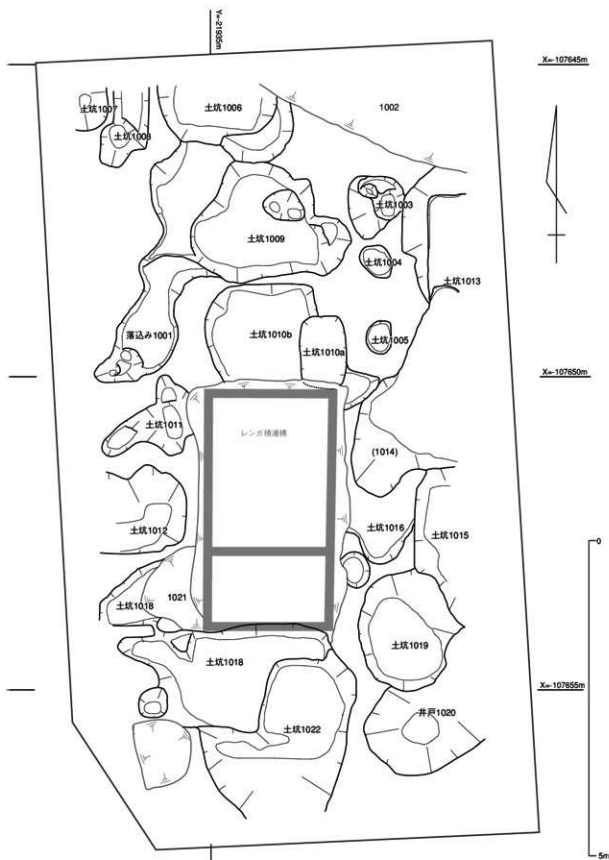


写真7 第1遺構面検出遺構平面図 [1/60]

近世の遺構としては、多数の土坑が検出された。約80mの調査区内に20を超える土坑がひしめく密集状態であったが、その多くからは江戸時代半ば以後の18～19世紀の土器・陶磁器類が出土している。また、埋土中に炭化物集積が層状に堆積する土坑が多数見受けられた。このうちのいくつかからは、金属滓や高熱を受けて発泡したスサ入り粘土塊などが出土している。これらは鑄造作業に伴う廃棄物と考えられる。烏丸上立売南西角や徳照館地点などにおける本学による発掘調査でも鑄造関連遺物が出土しているが、安土桃山～江戸時代初頭における烏丸今出川地点近くの一角に金属工房があった可能性もある。近世の絵図によれば、当地点が寛永年間には公家屋敷となっている様子がうかがえる。鑄造関連遺構・遺物は完全に公家屋敷化する以前の17世紀の状況を反映していると推測できる。

当遺構面で検出された遺構の位置・形態・規模・埋土質と推定される埋没時期は、表1に掲載している。ここでは、主要な遺構をとりあげて詳説したい。

石組1010a (図8)

調査区北半部で検出された、南北に長い不整形の石組遺構である。掘り方の規模は、長軸長142cm、短軸長91cm、深さ59cmであった。これは検出された規模であって、その上部は後世の攪乱を受けているため、実際の遺構深長はさらに大きく見積もらなければならない。不整形の掘り方は、土坑1010bの埋没後にその先端部を切って掘削されている。内部には、掘り方側面に沿って一辺20～30cm前後の大きさの石が積み上げられている。底面には、それよりやや小振りな15cm大の石が敷き詰められている。

埋土は、黒褐色中粒砂泥じりシルトを基調とするが、中に多くの礫が含まれていた。埋土中の礫は不規則に集積する状態で、シルト質の土壌より礫の量の多い部分もある状態であった。廃棄時に、側壁上部に積み上げられていた石組みが破壊されて礫が内部に崩落・充填された結果の堆積を示しているとも考えられる。

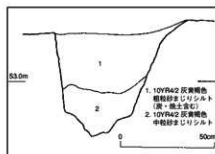


図9 土坑1008土層断面図 (1/20)

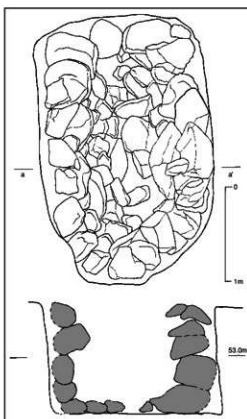


図8 石組1010a 平・断面図 (S=1/20)

また、1010bも含めて、埋土中には、17-18世紀を中心とした土師器・陶器・磁器片のほかに貝殻片や動物骨などが含まれていた。石組み構造をもつことから、当遺構は食料などの貯蔵施設の可能性があるが、埋土中からも食物残渣と見做せる遺物が確認できる。このことは、当調査区が台所などの食料加工の場として機能していた可能性を示唆している。

炭集積土坑1008 (図9)

土坑1006の西隣で検出された土坑。南北に伸び調査区外へと続き、溝状の形態を呈する。東西方向の幅が68cm、深さ約65cmの規模で、断面形態がV字形に近い形状であった。図3.1.3にみえるように、埋土は2層に分層できる。上層は灰黄色褐色粗粒砂まじりシルト、下層は灰黄色褐色粗粒砂まじりシルトがそれぞれ堆積しているが、いずれの土層にも多量の炭片・焼土片が混在している状態であった。

後述するように、当調査区からは近世前半期を中心とした遺構群から、大型の土製品が多数出土している。その多くは、鑄造に関わる炉壁の破片と推定される。当遺構からも炉壁片と思われる遺物が出土している。鑄造施設の改変や整理にともなう廃棄土坑だった可能性がある。

埋土中からは、そのほかに土師器・陶器細片が出土しているが、詳細な時期比定が可能なものはない。周囲で検出された遺構の時期から推定して、16~17世紀の所産と考えられる。

炭集積土坑1013.1014

調査区東辺で検出された不整形な土坑。当初、北半部を土坑1013、南半部を土坑1014と別遺構として認識して遺構掘削を進めたが、両者の間に明瞭な切り合い関係が認められないことから、一つの遺構として認識した。とはいえ、図6の調査区東壁の土層断面図にみえるように、土坑1013・1014ともに幾重にも小規模な土坑が集積的に形成されてきた遺構と考えられ、これ自体が廃棄土坑の集積とみるのが妥当と思われる。結果的には南北約3.5m、東西約1.5m以上の平面規模で、最大深長約1.2mとなっている。土坑集積であるために、平面・底面形態ともに著しく不整形であった。埋土中からは、16世紀後半~17世紀前半の土師器・陶器片が出土していることから、安土桃山~江戸時代初頭に形成された遺構集積と考えられる。

当遺構群の最大の特徴は、その埋土中に多量の炭片が含まれることである。このことから、火災後の廃棄土坑の可能性もあるが、幾重にも掘削が繰り返されていることから、単一の火災の後に形成されたものとは考えられない。当調査区では、1層を中心に鑄造に関わる炉壁などが多く出土していることから、鑄造施設の改変にともなう廃棄土坑の集積だった可能性も考えられる。

土坑1006

調査区北壁で検出された土坑。北半部は調査区外で正確な遺構形態は不明であるが、東西が長軸方向となる平面楕円形の土坑と考えられる。長軸長約105cm、短軸長60cm以上、深さ約165cmの規模である。底面が平坦ではなく丸い断面形態である。図4に示したように、埋土は、3層に分層可能であった。上層は黒褐色中粒砂まじり極細粒砂、中層は黒褐色礫まじり極細粒砂、下層は黒褐色中粒砂まじり極細粒砂がそれぞれ堆積している。溝2010b埋土を切って掘削されている。

埋土中からは、土師皿片・陶器片・瓦片などが出土しているが、土師皿の形態から17世

紀中～後葉の所産と推定される。当遺構の埋没時期も出土土器と同一時期と考えられる。生活に伴う廃棄土坑と考えられる。

井戸1020 (図9)

調査区南東端で検出された井戸。平面不整形円形で直径約140cm、深さ105m以上の規模であった。掘削深度が大きく、人力掘削が安全上不可能な状態であったため完掘できていない。120cm程度の深さはあったと考えられる。井戸枠は検出されておらず、上層に大量の礫が堆積していた。このことから、井戸廃絶後に井戸枠を抜き取り、その後礫で埋め戻したものと考えられる。図3.1.4にみるように、上部の礫集積は礫の隙間に土壌が見られないような状態であり、この部分が暗渠として機能していた可能性も考えられる。

埋土中からは、そのほかに土師器・陶器細片が出土しているが、詳細な時期比定が可能なものはない。周囲で検出された遺構の時期から推定して、近世の所産と考えられる。

3.2 第2面・室町～江戸時代初頭

第1面の基盤であった2層を除去して、無遺物層である3層で遺構検出を行ったのが第2面である。ただし、ここでも遺構の重複が著しく、2層除去中に3層の直上面で検出された遺構群と3層上面を精査して検出された遺構群があった。前者を第2a面検出遺構、後者を第2b面遺構として記述を進める。

(1) 第2a遺構面

第2a遺構面では、土坑2001・2002・2003・2004、溝2011、落込み2009が検出された。

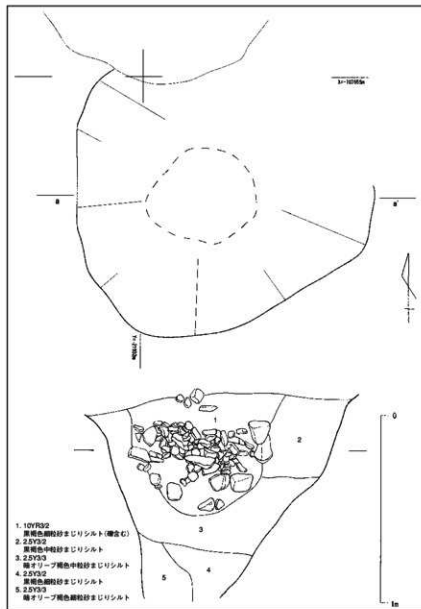


図9 井戸1020 平・断面図 (S=1/20)

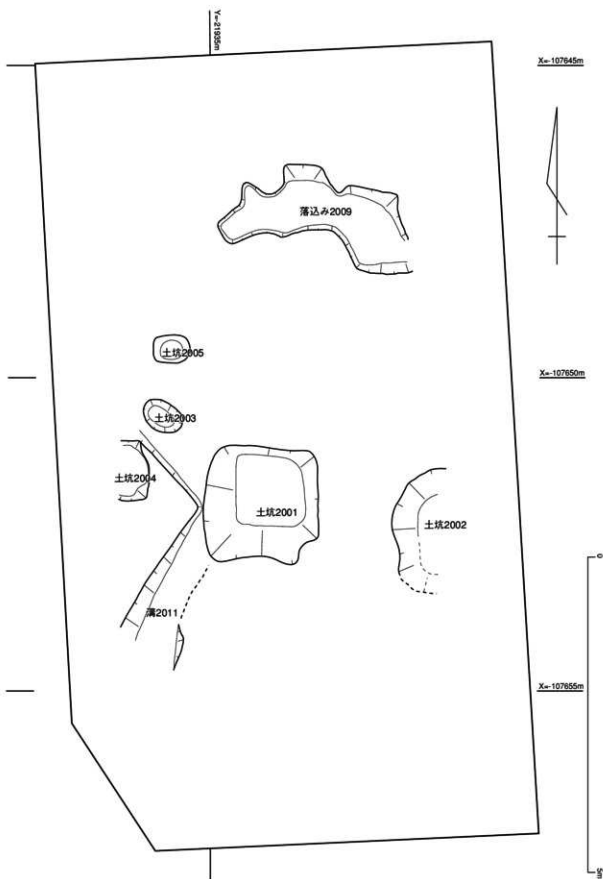


図10 第2a遺構面平面図 [1/60]

いずれの遺構の埋土からも、16世紀～17世紀中葉の土師器・陶磁器類が出土していることから、戦国時代～江戸時代初頭に形成された遺構群と考えられる。このうち土坑類は、廃棄土坑と考えられる。落込み2009は後述する溝2010の最上層の凹みに相当するとも考えられる。溝2011については性格不明である。

これらのうち、土坑2002については、図11の土層断面図に示すように、埋土中に炭化物を多量に含んだ堆積層が確認

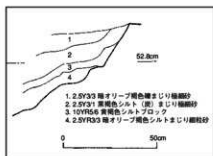


図11 土坑2002土層断面図 (1/20)

された。これは先述の炭集積土坑1013・1014の堆積状況と酷似している。周辺から炉壁片などの鋳造関連遺物が出土しているため、土坑2002もそういった施設の廃棄に関して形成された可能性がある。

(2) 第2b遺構面

また、第2a遺構面の遺構完掘後に検出された第2b遺構面では、第2遺構面では、南半部に土坑群と、北半部に東西方向の大規模な溝（溝2010）が検出された。土坑群は浅く不定形なものも多く、機能の特定は難しいが大半は廃棄土坑と考えられる。土坑の一部には、第2遺構面より上位から掘り込まれた可能性のある遺構も少数みられたが、それ以外は15～16世紀の所産と考えられる。以下特徴的な遺構について詳述する。

溝2010

北半部で検出された東西方向の溝2010は、3度にわたる掘削が行われたことが判明している（図6参照）。最初に掘削された溝2010cは、深さ約1.8m、北側肩部は調査区外であるが幅推定約5mの規模で、断面形態は逆台形であった。下層には流水堆積による細粒砂層が15cm程度以上の厚さで形成されていた。その流水堆積層を掘り込んで2番目の溝2010bが掘削されている。平面規模は不明であるが、深さは1.6m程度であった。埋土は礫混じりシルトの単一層相で、人為的に埋積された可能性が高い。その土層を掘り込んで溝2010aが形成されていた。幅約3.5m、深さ約1.5mの規模で、断面形態は逆台形であった。この溝は、南側方向からベース土のブロックを大量に含む細粒砂～シルト質土で埋積している。流れ込み状の層理が観察されることから、一度に人為的に埋めたのではなく、南側肩部のベース土や土壘などが崩落して埋積したものと考えられる。

このように溝2010a,b,cの形成過程は、自然埋積・人為的埋積を繰り返しながらも固定した位置に何度も大規模な堀状施設が掘削されていたことを示している。3時期の遺構埋土から土師器片が出土している。溝2010aについては15～16世紀の土師器皿などが看取されたが、溝2010b,cについては出土遺物が僅少で埋没年代の確定が難しい。調査時の所見からは、15世紀ごろに堆積・再掘削が行われたと想定しておきたい。

第2遺構面の主要遺構の形成された中世後半～戦国期には、上杉家本「洛中洛外図屏風」が有名であり、そこには当地点が「伊勢守」の屋敷地として描かれている。このことから、室町幕府の政所執事であった伊勢氏の居宅と考えられている。今回検出された土坑群や堀状遺構は、伊勢氏居宅に付帯する施設と考えられる。出土土器からみれば、15～16世紀の応仁の乱から戦国期にかけての戦乱に関連して溝2010aが形成・機能していたと考えられる。しかし、溝2010cの形成・埋没時期が14世紀に遡るとすれば遺構の形成の契機は違っ

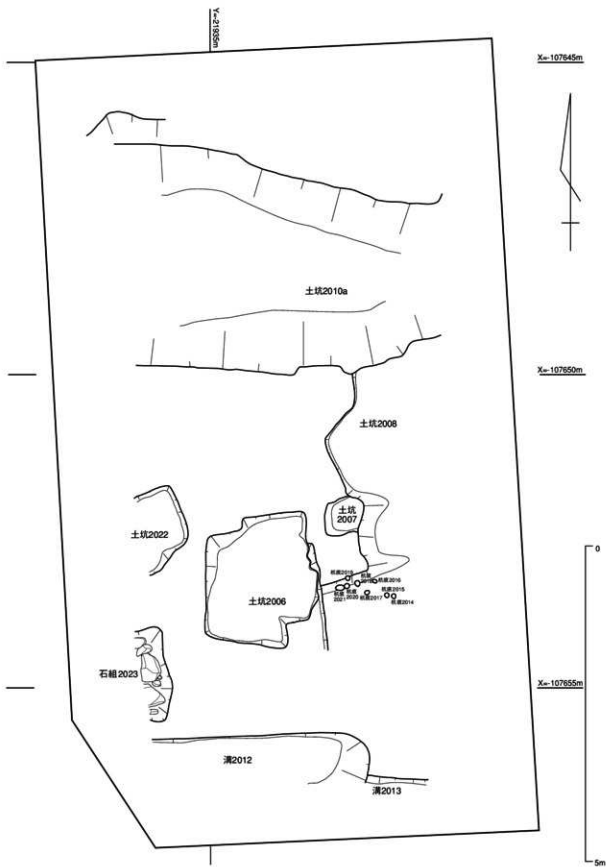


图12 第2 b遺構面檢出遺構平面圖 [1/60]

たものになり、問題点といえる。ただし、応仁の乱～戦国期にこの溝が機能していたことは確実であり、そういった意味でも上杉家本『洛中洛外図屏風』の景観の一端が検出されたことは間違いないだろう。

杭痕2014～2021

調査区南東部には、小穴が8基程度（杭痕2014～2021）集中して検出された。いずれも平面形態が径10cm程度の不整形円で深さ約15cm程度である。形状・規模から柱穴とは考えにくく、杭痕と考えられる。明確な列状配置を呈するわけではないが、東西方向に広がる状態で検出されている。東西方向の柵のようなものが幾度か立て替えられた結果形成された可能性がある。この杭列群の東西は、土坑などにより、基盤層である3層が深くえぐられている。つまり、杭痕はさらに東西に連続して形成されていた可能性もある。

これらが、東西方向の柵の痕跡だとすると、先述の溝2010に平行していることになる。杭痕内から時期の判別できる土器は出土していないが、溝と柵が同時存在して可能性も考慮する必要があるだろう。

石組み2023

調査区南西端で検出された長軸長約145cmの不整形土坑は、その底面に石が敷かれていた。おそらく、石組み遺構であったものが側壁の石が抜き取られて底面だけ残存したものと考えられる。遺構埋土からは土器細片が出土しただけで、詳細な形成時期は不明である。このような石組み遺構は、近世の貯蔵庫として形成されることが多い。第2b遺構面検出遺構の主たる時期は15～16世紀と考えられるが、当遺構については近世に形勢された遺構であった可能性も考えられる。

表1 検出された遺構一覧

遺構種類	遺構番号	遺構面	短軸長/幅(cm)	長軸長(cm)	深さ(cm)	埋土	備考	構造・埋没時期
凸込み	1001	1				25Y3/2 黒褐色粘質土層、炭・礫・レンガ混じり		江戸時代前半
土坑	1003	1	92	107	26.8	10YR3/2 黒褐色粘質土層、炭・礫少量混じり		江戸時代
土坑	1004	1	44	58	18.0	10YR3/2 黒褐色粘質土層、炭・礫少量混じり		江戸時代
土坑	1005	1	39	54	34.3	10YR3/2 黒褐色粘質土層、炭・礫少量混じり		江戸時代
土坑	1006	1	122	232	84.7	10YR2/3 黒褐色中粒砂混じりシルト、炭・礫少量混じり		江戸時代前半
土坑	1007	1	不明	85	65.6	10YR3/2 黒褐色中粒砂混じりシルト		江戸時代前半
土坑	1008	1	74	145	67.2	10YR2/3 黒褐色中粒砂混じりシルト、炭・焼土混じり	卵礫片多数出土	江戸時代前半
土坑	1009	1	200	336	50.6	10YR3/3 暗褐色中粒砂混じりシルト、炭・礫混じり		安土桃山～江戸時代初期
石組	1010a	1	208	296	74.7	10YR3/2 黒褐色中粒砂混じりシルト、大礫混じり		江戸時代
土坑	1010b	1				10YR3/2 黒褐色中粒砂混じりシルト、大礫混じり		江戸時代
土坑	1011	1	100	165	40.0	10YR3/2 黒褐色中粒砂混じりシルト、礫混じり		江戸時代前半
土坑	1012	1	140	135	55.8	25Y3/2 黒褐色中粒砂混じりシルト、礫混じり		安土桃山～江戸時代初期
土坑	1013	1	102	534	105.6	25Y4/2 暗灰色中粒砂混じりシルト、炭・礫混じり		江戸時代前半
土坑	1014	1				25Y3/2 黒褐色中粒砂混じりシルト、炭・礫少量混じり		江戸時代
土坑	1015	1	72	251	64.9	25Y3/2 黒褐色中粒砂混じりシルト、炭・礫混じり		江戸時代
土坑	1016	1	不明	不明	12.1	10YR3/2 黒褐色中粒砂混じりシルト、炭・礫混じり		江戸時代
土坑	1017	1	41	58	17.9	10YR3/2 黒褐色中粒砂混じりシルト、炭・礫混じり		江戸時代
土坑?	1018	1	180	338	65.6	25Y3/2 黒褐色中粒砂混じりシルト、炭・礫混じり		江戸時代前半
土坑	1019	1	159	196	52.0	25Y3/2 黒褐色礫混じり極細砂	こぶし大の礫を大量に含む	江戸時代
井戸	1020	1	127	168	108.0	25Y3/2 黒褐色礫混じり極細砂(1019と同様だが礫少ない)		安土桃山～江戸時代初期
土坑	1022	1	258	308	88.7	25Y3/2 黒褐色シルト、礫混じり	1018下層	江戸時代前半
土坑	2001	2a	170	182	34.7	25Y3/2 黒褐色中粒砂混じりシルト、礫・炭・土器多量に含む	レンガの下	安土桃山～江戸時代初期
土坑	2002	2a	68	193	44.8	25Y3/2 黒褐色礫混じり砂砂、炭・土器片混じる		江戸時代
土坑	2003	2a	66	48	9.8	25Y3/2 黒褐色礫混じりシルト		安土桃山～江戸時代初期?
土坑	2004	2a	68	96	34.7	25Y3/3 暗灰色ろくろ色細粒砂混じりシルト	こぶし大の礫を多量に含む	安土桃山～江戸時代初期?
土坑	2005	2a	44	58	7.5	10YR3/3 暗褐色中粒砂混じりシルト、若干礫含む		安土桃山～江戸時代初期?
土坑	2006	2b	180	216	13.0	25Y3/2 黒褐色中粒砂混じりシルト、炭・礫混じり		安土桃山～江戸時代初期?
土坑	2007	2b	155	310	10.0	10YR3/3 におい・黄褐色細粒砂混じりシルト	溝2010最上層・伊壁・焼造瓦遺品	安土桃山～江戸時代初期
土坑	2008	2b	不明	不明	41.0	10YR3/3 暗褐色細粒砂混じりシルト	東部落ち込み、礫はこぶし大	戦国期～安土桃山時代
土坑	2009	2a	132	306	18.1	10YR3/3 暗褐色細粒砂混じりシルト	礫は小	安土桃山～江戸時代初期
溝	2010	2b	392	不明	164.3	10YR3/4 暗褐色細粒砂混じりシルト		室町時代後半
土坑	2011	2a				10YR2/3 黒褐色細粒砂混じりシルト	南西部	安土桃山～江戸時代初期
土坑	2012	2b	78	348	79.9	10YR3/2 黒褐色細粒砂混じりシルト	南東端	戦国期～安土桃山時代
土坑	2013	2a	不明	不明	92.0	10YR3/4 暗褐色細粒砂混じりシルト	南東端	安土桃山～江戸時代初期?
杭跡	2014	2b	80	80	10.0	10YR3/4 暗褐色細粒砂混じりシルト	南東端、杭列	安土桃山～江戸時代初期?
杭跡	2015	2b	65	65	10.0	10YR3/4 暗褐色細粒砂混じりシルト	南東端、杭列	安土桃山～江戸時代初期?
杭跡	2016	2b	64	64	10.0	10YR3/4 暗褐色細粒砂混じりシルト	南東端、杭列	安土桃山～江戸時代初期?
杭跡	2017	2b	78	78	10.0	10YR3/4 暗褐色細粒砂混じりシルト	南東端、杭列	安土桃山～江戸時代初期?
杭跡	2018	2b	86	86	10.0	10YR3/4 暗褐色細粒砂混じりシルト	南東端、杭列	安土桃山～江戸時代初期?
杭跡	2019	2b	70	70	10.0	10YR3/4 暗褐色細粒砂混じりシルト	南東端、杭列	安土桃山～江戸時代初期?
杭跡	2020	2b	90	90	10.0	10YR3/4 暗褐色細粒砂混じりシルト	南東端、杭列	安土桃山～江戸時代初期?
杭跡	2021	2b	82	140	10.0	10YR3/4 暗褐色細粒砂混じりシルト	南東端、杭列	安土桃山～江戸時代初期?
土坑	2022	2b	76	144	28.8	10YR3/4 暗褐色細粒砂混じりシルト	南西部	安土桃山～江戸時代初期?
石組	2023	2b	50	130	?	10YR3/4 暗褐色細粒砂混じりシルト	1面遺構の検出漏れ	江戸時代



写真2 第1遺構面(南から)



写真3 第2b遺構面(北から)

4. 出土した遺物

落込み1001出土遺物（図13・写真4）

落込み1001からは、土師器皿・土鍋・焼塩壺・瓦・陶器・磁器・染付・土人形・土製品・金属製品・銅金具・鉄器・銭貨が出土している。このうち図化、掲載が可能であったのは40点であった。47・53は、底部がへそ状に押し上げられ、口縁は丸く立ち上がる形態の小型の土師器皿である。京XI新からXII期に相当する形態である。大型の土師器皿117・109・107・108は平坦な底部をもち、いずれも凹状圏線がみられるが、117が明確な凹状圏線を施すのに対し、109・107の順に凹状圏線は弱くなる。108になると底部が残っていないこともあって凹状圏線は明確でない。いずれも京XII期に相当する形態である。106は凹状圏線をもたない大型の土師器皿で、底部から体部にかけて丸く立ち上がり、外反することなく口縁までをおさめる形態的である。XI新からXII古段階の過渡期にあたると思われる。



写真4 落込み1001出土遺物

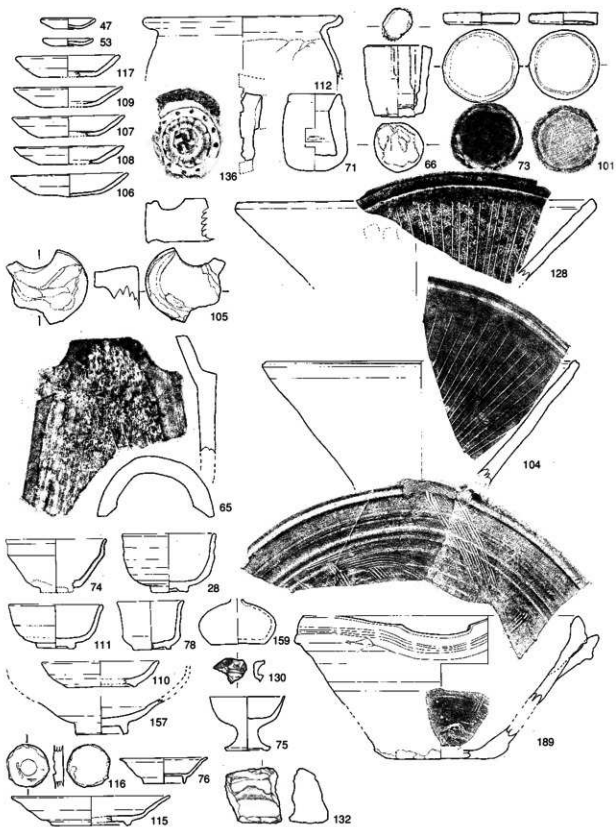


图13 落込み1001出土遺物

112は、羽部分は残っていないが、土師質の土鍋である。口縁部が内傾した後、蓋受が「S」字状に開く形態である。71・66は焼塩壺である。71が輪積み成形であるのに対し、66は板作り成形と異なる。胎土、色調は、71が最大で6mm程度の砂粒を多く含む橙色であるのに対し、66は2mm程度の雲母を多く含むにぶい橙色である。73・101は焼塩壺の蓋である。

136は、中房に「卍」字を配する複弁8葉蓮華文軒丸瓦である。平安京左京三条三坊十一町遺跡出土瓦に類例があり、12～13世紀代と報告されている（古代学協会『平安京左京三条三坊十一町』1984）。105は鬼瓦の一部と思われる。65は内面に布痕を残す丸瓦である。

74は瀬戸美濃系の天目碗で、黒褐色の鉄釉を施す（17世紀）。28は灰白色の鉄釉を施した陶器碗で、瀬戸美濃系と考えられる。111も同じく瀬戸美濃系の灰陶器碗で、灰白色の鉄釉を施す。78は灰白色の釉薬を薄く施した陶器碗で、瀬戸美濃系と考えられる。159は肥前系陶器の水筒で、頸部が破損している。110は瀬戸美濃系陶器皿（志野丸皿）で、黄橙色の釉薬を施す。157は肥前系陶器の鉢、もしくは大型の皿であると考えられる。116は、側面が丸く打ち欠かれており、青磁碗もしくは皿の底部、高台の内側部分と考えられる。76は染付の小皿である。115は染付の皿である。130は土人形の一部で、髻を描いていることから牛か馬の頭部であると考えられる。75は黄緑灰色磁器製の仏飯具で、肥前系と考えられる。

132・1047は炉壁材の一部と思われる土製品である。128は外面黄灰色、内面灰色の丹波系播鉢である。口縁部形態はやや丸みを帯びた断面方形で内面に1条の凹線を有する。104は外面赤褐色、内面淡黄色の丹波系播鉢で、内面は摩滅して部分的に灰赤色を帯びる。口縁部形態は断面方形で内面に1条から2条の凹線を有する。180は内外面背褐色の備前系播鉢である。口縁部形態は断面三角形で短部に1条の凹線を有する。

1011は用途不明の金属製品で、径5.2～6.5cm、厚さ0.1cmの自転車の呼び鈴のような形態をしている。1009は「景德元寶」の銘のみえる銭貨である。径2.5cm、厚さ0.1cm。景德元寶は北宋1004年に発行されている。1016は銘不明の銭貨で、径2.5cm、厚さ0.2cmである。1014（左）は寛永通寶と思われる銭貨である。径2.5cm、厚さ0.1cm。1014（右）は用途不明の「コ」字形の銅金具で、縦1.2cm、横長辺1.5cm、横短辺0.9cm、幅1.1cm、厚さ0.1cmである。1056は長さ5.3cm、径0.7～0.9cmの釘と考えられる鉄器である。

複弁8葉蓮華文軒丸瓦、志野など一部時代のさかのぼる遺物も含まれるが、土師器皿、播鉢、などの形態から、16世紀半ばから17世紀半ばの所産を中心とする。このことから、当遺構の形成・埋没年代は江戸時代初頭と考えられる。

土坑1002出土遺物（図14・写真5）

土坑1002からは、土師器皿・陶器・磁器・瓦が出土している。そのうち図化、掲載が可能であったのは鉄釘の1点である。鉄釘131は長さ8.0cm、推定径が0.3～0.4cmである。



図14・写真5 土坑1002出土遺物（1/4）

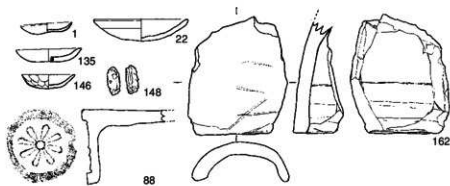


図15・土坑1006出土遺物 (1/4)

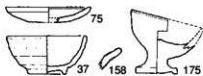


図16・土坑1007出土遺物



写真6 土坑1007出土遺物

土坑1006出土遺物 (図15)

土坑1006からは、土師器皿・陶器・磁器・青磁・染付・土製品、瓦が出土している。このうち図化が可能であったのは8点である。1は、底部をやや押し上げたへそ皿の要素を残す薄片、小型の土師器皿である。京XII新から京XIIに相当する形態である。135は底部が平たく厚手、小型の土師器皿である。京XIIに相当する形態である。146は、底部が丸く、指押さえて口縁を摘み上げた後、外面で消しを施さない小型の土師器皿である。22は底部が丸く厚口で口縁端部に面をもたない形態の土師器皿である。凹状圏線は立ち上がり部よりやや上部に位置し、ヘラ状の工具で意図的に施している。口縁部にスス痕跡のある灯明皿である。京XII新からXII古期に相当する形態である。

148は、炉壁材の一部と思われる土製品である。88は単弁8葉の小型の軒丸瓦、162は丸瓦である。

土師器皿の形態から、当該遺構の形成・埋没時期は、17世紀半ばから18世紀半ば、すなわち江戸時代中期に相当すると考えられる。

土坑1007出土遺物 (図16・写真6)

土坑1007からは、土師器皿・陶器・磁器が出土している。このうち図化・掲載が可能であったのは4点である。190は、底部が比較的平坦で、口縁の内外面をなで断面三角形に仕上げた厚手の土師器皿である。京XII期に相当する形態である。37は、瀬戸美濃系の天目碗で黒褐色の鉄釉を施す。158は、青磁皿の口縁部片で、中国産と思われる。175は、肥前系磁器の仏飯具である。

土師器の形態から判断すれば、当該遺構の形成・埋没時期は、16世紀末から17世紀半ば、すなわち江戸時代初頭には埋没していたと考えられる。

土坑1008出土遺物 (図17・写真7)

土坑1008からは、陶器・青磁・染付・瓦・土製品が出土している。このうち図化・掲載が可能であったのは、土製品4点、青磁片1点の5点であった。



図17 土坑1008出土遺物 (1/4)



写真7 土坑1008出土遺物

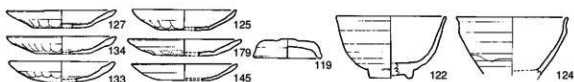


図18 土坑1009出土遺物 (1/4)

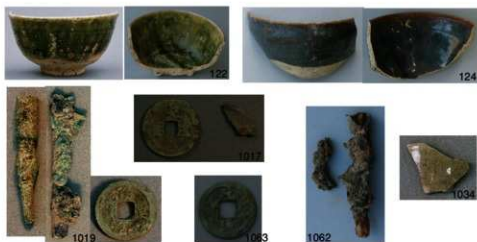


図18 土坑1009出土遺物 (1/4)

172・1044・1041・1035は、炉壁材の一部と思われる土製品である。1044は縦4.5cm、横6.3cm、最大厚1.3cmである。1041は縦7.0cm、横10.5cm、最大厚3.2cmである。1035は縦9.4cm、横10.3cm、最大厚3.2cmである。1021は青磁片である。直立する口縁の耳部で、直口壺もしくは香炉の一部と考えられる。

土坑1009出土遺物 (図18・写真8)

土坑1009からは、土師器皿・焼塩壺蓋・陶器・染付・鉄器・銭貨・青磁が出土している。このうち図化・掲載が可能であったのは、18点 (14図・写真) であった。

127・134は平坦な底部から指押さえによって体部がやや外反して立ち上がり、口縁部はなでて丸く断面三角形に仕上げた土師器皿である。内面体部立ち上がり部分に技法痕として凹状圏線が残る。127は残存した口縁部ほぼ全面に、134は一部にスガが付着した灯明皿である。京XII古からXII中期に相当する形態である。133は、底部から体部にかけて丸く立ち上がり、口縁部をなでて丸く断面三角形に仕上げた土師器皿である。京XIIからXII古期に相当する形態である。内面体部立ち上がり部分に技法痕として凹状圏線が残る。口縁部に

ススが付着した灯明皿である。125は、平坦な底部から直線的に体部が立ち上がり、そのまま上方に口縁部が立ち上がる形態の土師器皿である。内面体部立ち上がり部分に凹状圏線が残る。残存する口縁部全体にススの付着した灯明皿である。179は、ほぼ平坦な底部から体部、口縁へと丸く立ち上がる形態の土師器皿である。内面体部立ち上がり部分に凹状圏線が明確に残る。口縁部にススの付着した灯明皿である。145は、底部から体部、口縁と丸く立ち上がる、薄手の白色系土師器皿である。

119は焼塩壺の蓋である。122は、暗オリーブ色の灰釉を施した瀬戸美濃系陶器碗である。総織部であろう。124は、暗緑灰色の釉薬を施した瀬戸美濃系の天目碗である。1034は、灰オリーブ色の透明な釉薬を施した陶器片である。皿、もしくは鉢の口縁部と思われる。

1019 (左)は、欠損しているが、口付の部分が折れ曲がる形態の銅製キセルの吸い口である。肩の付け根部に3条の凹線、また吸い口の膨らんだ部分に縦方向の凹線を施している。残存長が5.8cm、肩部径が1.0cm、吸い口最小径が0.5cmである。1019 (中)は用途不明の銅製品である。残存長6.2cm、幅0.7～1.0cm、厚さ0.4～0.6cmである。1019 (右)は、径2.4cm、厚さ0.1cmの銭貨である。紹聖元寶の銘がうかがえる。紹聖元寶は1094年発行とされる北宋銭である。1017 (左)は、径2.4cm、厚さ0.1～0.2cmの銭貨である。元豐通寶の銘がうかがえる。元豐通寶は1078～1085年発行とされる北宋銭である。1017 (右)は厚さ0.1cmの銭貨である「通」字のみ読み取れる。1063は、径2.4cm、厚さ0.1cmの銭貨である。元豐通寶の銘がうかがえる。1062 (左)は、残存長8.2cm、径0.5cm (鏽部を除く)の断面方形の鉄釘である。1062 (右)は、残存長3.5cmの鉄釘片と思われる鉄器である。

当該遺構の形成・埋没時期は、土師器皿の形態から16世紀末から17世紀後半、すなわち江戸時代前半に相当すると考えられる。

土坑1010出土遺物 (図19・写真9)

土坑1010からは、土師器皿・陶器・磁器・染付・青磁・焼塩壺蓋・埴・瓦・土製品・獸骨・ガラス製品・銅製品・銭貨・貝類が出土している。このうち図化、掲載が可能であったのは35点である。

118は、内外面に灰オリーブ色の釉薬を施した肥前系陶器の山蓋である。121は、上外面に緑灰色の釉薬を施した肥前系磁器の落し蓋である。上外面中央に粘土紐を「ℓ」字状に巻いた取っ手が付く。86は、染付菊皿である。138は、胴部が算盤玉形を呈する肥前系陶器の土瓶である。注口上部と反対側に弦を通す耳が付く。白線で模様を描いた上に灰オリーブ色の釉薬を施すが、下部2.2cmは無釉である。137は、胴部が算盤玉形を呈し、胴上部に19条の浅い凹線を施した肥前系陶器の土瓶である。灰オリーブ色の釉薬を施すが、下部2～3センチは無釉である。注口、取っ手部分は破損している。167は、丸胴、小型の肥前系陶器の土瓶、もしくは水注である。注口上部と反対側に耳が付く。オリーブ色の釉薬を施し、注口左面にゆったりした衣服を着た人物座像、右面に「■お家」の文字を白色で描く。

120は、底部から口縁まで丸く立ち上がる薄手の土師器皿である。口縁部をなでた際の工具痕が外面に残り、ヘラ状の工具で凹状圏線を施す。口縁一部にススの痕跡を残した灯明皿である。京XIIIに相当する形態である。

100は、焼塩壺の蓋である。200は、中央に径2cmの孔を空けた瓦である。153は、炉壁材と思われる土製品である。142は、中に土製小玉が入った土鈴である。144は半裁した土

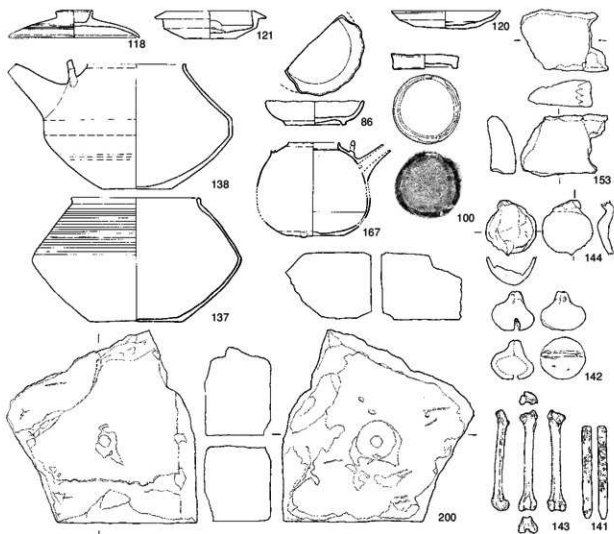


図19 土坑1010出土遺物

鈴である。141はガラス製の管である。長さ9.8cm、幅0.9cm、厚さ0.3cm、断面は薄い蒲鉾形を呈する。1025aは青磁の口縁部である。1025bは青磁片である。1024は、白磁皿の底部片で、内面に葉文が描かれる。1013は、径0.2~0.3cm、長さ10.8cmの銅金具である。管と思われる。1010は、径2.4cm、厚さ0.1cmの銭貨である。寛永通寶の銘がうかがえる。

143(図・写真左)は、イヌの左大腿骨である。143(写真右)はイヌ、もしくはタヌキの右上腕骨である。1003左は、イヌの右脛骨である。1003右は、イヌの右大腿骨である。1007は、イヌと思われる右前頭骨の眼窩上部である。1001は、殻長10cmになるアカガイである。1005の左2点は不明貝類、3番目はイノシシ、もしくはブタの右足指骨の基部骨、4番目は獣骨である。1008の上2点は不明貝類、下2点はシジミガイ科の貝類である。1004の2点はシジミガイ科の貝類である。

当該遺構の形成・埋没時期は、土師器皿の形態から判断して、17世紀後半から18世紀半ば、即ち江戸時代中期に相当すると考えられる。

土坑1011出土遺物(図20・写真10)

土坑1011からは、土師器皿・陶器・染付・瓦器・土人形が出土している。このうち図



写真9 土坑1010出土遺物

化・掲載が可能であったのは、陶器・染付・獣骨・貝類・鉄器の8点であった。

84は、丸胴、小型の肥前系陶器の片口鉢、もしくは行平鍋である。底部と蓋受部分を除く内外面に灰オリーブ色の軸葉を施す。底部脇に3個の団子状の脚が付き、口縁直下に半円の穴を空け、注口を付ける。欠損しているが、注口右面に取っ手が付くと思われる。155は染付皿である。1006は、タイの鰹骨である。1002は、魚類の椎骨である。1060は、長さ5.3cm、錆も含めた径0.9cmの鉄器である。1061は、長さ2.9cm、径0.3~0.4の鉄器である。土坑1012出土遺物（図21・写真11）

土坑1012からは、土師器皿・陶器・青磁・染付が出土している。このうち図化、掲載が可能であったのは5点であった。

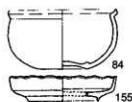


図20 土坑1011出土遺物 (1/4)



写真10 土坑1011出土遺物

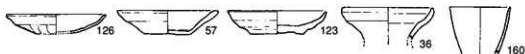


図21 土坑1012出土遺物

126は、底部から体部、口縁まで丸く立ち上がり、薄手で口縁端部に面を持たない形態の土師器皿である。京XIII期に相当する形態である。57は、わずかに中央が押し上げられた底部を持ち、口縁端部に面を持たない形態の土師器皿である。目立たないが製作技法としての凹状圏線が認められる。京XII期に相当する形態である。123は、透明から灰オリーブ色の灰釉を施す陶器で、瀬戸美濃系の灰釉丸皿である。高台皿から高台内まで灰オリーブ色の釉薬が付着している。36は、中国系青磁で広口瓶の口縁部である。160は、染付の蕎麦猪口である。



写真11 土坑1012出土遺物

当該遺構の形成・埋没時期は、土師器皿の形態から判断すると17世紀から18世紀半ば、すなわち江戸時代前半期の幅で捉えることができる。

土坑1013出土遺物 (図22・写真12)

土坑1013からは、土師器皿・陶器・染付・青磁・瓦器・炮烙・焼塩壺・鉄器・銭貨が出土している。このうち図化、掲載が可能であったのは、14点であった。

165は、底部がやや押し上げられ、体部から口縁まで直線的に開く、口縁端部に面をもたない形態の土師器皿である。193は、ほぼ平坦な底部から丸く立ち上がり、なでにより体部から口縁部にかけてわずかに外反する形態の土師器皿である。京XI中からXII中期に相当する形態である。184は、ほぼ平坦な底部から、体部、口縁部へと直線的に開く、口縁端部に面をもたない形態の土師器皿である。198は、底部中央がやや押し上げられ、体部が指押さえによってやや外反するも、口縁は内湾して立ち上がる形態の土師器皿である。製作技法としての凹状圏線が認められる。京XII古から中期に相当する形態である。140は、底部から丸みをもって立ち上がり、指押さえによってわずかに外反する、口縁端部に面をもたない形態の土師器皿である。ヘラ状の工具で凹状圏線を施す。京XIII期に相当する形態である。196は、底部から丸みをもって立ち上がり、口縁端部に面をもたない形態の土師器皿である。

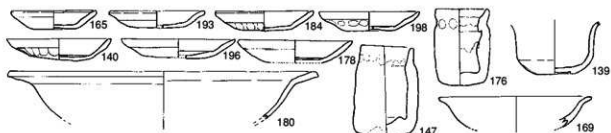


図22 土坑1013出土遺物

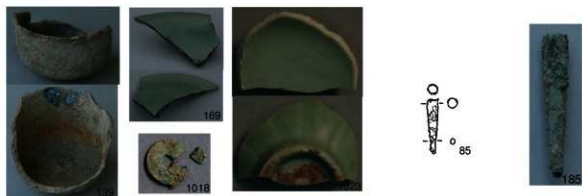


写真12 土坑1013出土遺物

図23 土坑1014出土遺物〔1/4〕
写真13 土坑1014出土遺物

ヘラ状の工具で凹状圏線を施す。色調は橙色を呈し、口縁部にはスス痕を有する灯明皿である。京XIII期に相当する形態である。178は、厚手でいぶい橙色を呈する土師器皿である。凹状圏線をもつ。口縁部にスス痕を有する灯明皿である。京XIII期に相当する形態である。180は、土師質の炮烙である。外面に薄くススが付着する。

147・176は、いずれも輪積み成形で製作した焼塩壺である。139は、自然釉のかかった碁笥底の陶器碗である。169は、中国系の青磁鉢である。1023は、中国系の青磁鉢である。外面に葉文を描く。1018は、径2.4cm、厚さ0.1cmの銭貨である。銘は不明である。

当該遺構の形成・埋没時期は、土師器皿の形態から判断すると、16世紀半ばから18世紀半ばの範囲で捉えることができる。

土坑1014出土遺物 (図23・写真13)

土坑1014からは、土師器皿・陶器・銅製品が出土している。このうち図化、掲載が可能であったのは1点のみであった。185は、銅製キセルの吸い口で長さ5.8cm、最大径は1.0cmである。

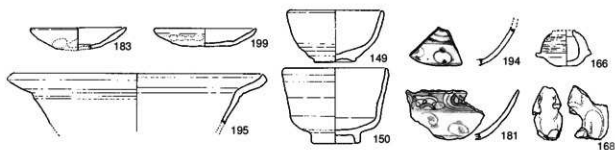


図24 土坑1018出土遺物〔1/4〕



写真14 土坑1018出土遺物

土坑1018出土遺物（図24・写真14）

土坑1018からは、土師器皿・煮沸具・陶器・磁器・土製品が出土している。このうち、図化可能な個体は9点であった。183、199はともに土師皿である。外面体部下半に指押さえ痕がうかがえ、内底面縁に圈線もつ形態である。口縁端部外側に小さく端面をつくりだしている。京XII期新～XII期前半に相当する形態である。195は、土師質の焙烙鍋である、口縁部が明確に屈曲して外反し、端部が小さく突出する形態である。外面には薄く煤が付着している。166はミニチュアの土釜形土製品である。168は、土師質土製品片であり、下部に刺突状の凹みが見える。土人形と考えられるが、全体形態は不明である。

149は、天目碗で褐色系胎土色から肥前系陶器と考えられる。150は、灰色系釉を施した碗で、褐色系胎土色から肥前系陶器と考えられる。194、181は染付碗である。181は乳白色のやや軟質胎土で釉色もやや黄色がかっている。

土師器皿形態や、肥前系陶器が一定程度出土することから、当遺構出土土器群の主体は17世紀前半に帰属し、当遺構の形成・埋没年代は江戸時代初頭と考えられる。

土坑1019出土遺物（図25・写真15）

土坑1018からは、土師器皿・陶器・磁器・土製品・銅銭が出土している。このうち図化、掲載が可能であったのは、6点であった。177は、底部が丸く厚口で口縁端部に面をもたない形態の土師器皿である。京XIII期に相当する形態である。187無釉の陶器小鉢で、色調は灰色。丹波系と考えられる。188は染付小碗で口縁部が外反する形態である。173は、青磁皿で内底面に葉文が描かれる。

170は、大型土製品の破片である。胎土中にスサなどの植物繊維を多く含んでいたと思われる、その部分が不整形な空隙となっている。斑点状に黒化している部分もみられ、二次焼成を受けた痕跡がある。炉壁などの破片の可能性が高い。1063は径2.3cm、厚さ0.1cmの銅

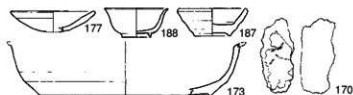


図25 土坑1019出土遺物 (1/4)



写真15 土坑1019出土遺物

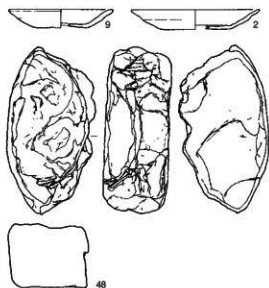


図26 井戸1020出土遺物 (1/4)



写真16 井戸1020出土遺物

銭である。元豊通寶との銘がうかがえる。元豊通寶は、1078～1085年発行とされる北宋銭である。

当遺構から出土した土器類は、土師器皿や磁器類の形態から、17世紀後半～18世紀前半の所産を中心とする。このことから、当遺構の形成・埋没年代は江戸時代前半期と考えられる。

井戸1020出土遺物 (図26・写真16)

井戸1020からは、土師器皿・陶器・磁器・土製品が出土している。いずれも碎片が多く、図化・掲載が可能であったのは、3点であった。2・7は土師器皿である。底面は平坦で直線的に口縁部が立ち上がる形態で、口縁端部外側に小さく面を有する形態である。2の内底面縁には圏線がみられるが7にはみられない。京Ⅺ期新～Ⅻ期古の形態である。この土師器を参考にするかぎり、当遺構の埋没時期は、16世紀後半～17世紀初頭の安土桃山～江戸時代初頭に相当する。

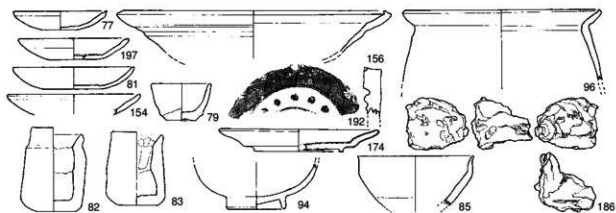


図27 土坑1022出土遺物〔1/4〕

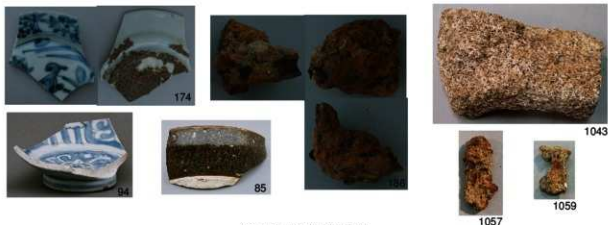


写真17 土坑1022出土遺物

48は、大型の土製品破片である。外縁が弧状形態を示し、平坦な形状である。厚さ約7cmである。厚い円形・半円形の土製品で、下面は平滑に仕上げられているが、上面はやや不整形である。用途は不明であるが、全体に二次焼成をうけたように淡赤色がかった色調を呈する。

土坑1022出土遺物（図27・写真17）

土坑1022からは、土師器・陶器・磁器・土製品・瓦片が出土している。77・197・81・154は土師器皿である。77は、口縁部外端に小さな面を有する形態である。197・81・154には、内底面縁に圏縁がうかがえるが77には看取できない。京XII期に相当する形態が主体である。

156は土師器焙烙鍋で外面に煤が付着している。口縁端部を明確につまみあげる形態で、内面は浅黄橙色を呈する。96は、土師器鍋口縁部で、これも口縁端部を明確につまみあげる形態で内外面とも浅黄橙色を呈する。82・83は焼塩壺である。いずれも口縁内面が外傾し、外底面縁が丸み帯びる形態である。いずれにもぶい橙色を呈する9は、灰釉小鉢で、橙色を呈する胎土色から肥前系と考えられる。94は染付碗、174は内面にのみ施文した染付皿で底面に目砂が付着している。85は、天目碗で、白色系の胎土色から美濃瀬戸系と考えられる。

当遺構から出土した土器群は、土師器皿の形態から17世紀後半～18世紀前半を中心とし

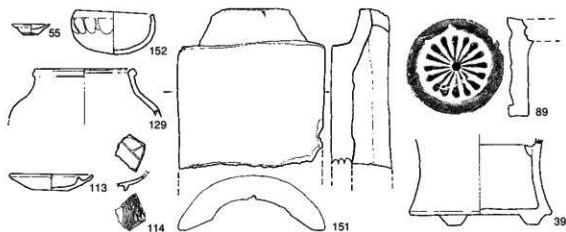


図28 1層出土遺物 (1/4)



写真18 1層出土遺物

ていると考えられる。当遺構の機能・埋没年代も江戸時代前半期と想定される。

92は幅広の平縁を有する軒丸瓦である。欠損していて明確ではないが珠文の内側には巴文があったと考えられる。

186は、大型土製品の破片である。幅0.8cmほどの「く」字形の鉄芯の周囲に粘土がまきつけられて焼成された状態である。胎土中にスサなどの植物繊維を多く含んでいたと思われる、その部分が不整形な空隙となっている。斑点状に黒化している部分もみられ、二次焼成を受けた痕跡がうかがわれる。鉄芯の基軸に粘土を固めてつくられた大型土製品の破片と考えられ、炉壁などの一部であったと推定できる。1057・1059は同規模の鉄棒の破片である。また、当遺構からは1043のような容器状に加工された花崗岩の破片が出土している。長さ20cm、幅15cm程度の大きさである。

1層出土遺物 (図28・写真18)

1層からは、多数の遺物が出土しているが、細片が多い。特徴のある個体10点だけを図化・掲載可能した。

55は土師器質のミニチュア鉢である。口径約4cmで全体ににぶい黄橙色を呈する。152は丸底の土師器小鉢である。口径縁部は強いヨコナデで仕上げられ、外面に指押さえ痕がみられる。全体に灰白色を呈する。

129は灰軸の壺で、褐色系を呈する胎土色から肥前系陶器と考えられる。113は、灰白色軸陶器の灯明皿である。瀬戸美濃系陶器と考えられる。114は染付碗底部片であるが、焼継がみられる。39は、筒形を呈する陶器鉢で、半球形の3点支脚がみられる。62は九瓦片である。89は、小型の軒丸瓦で、菊花文が施されている。

1045は太さ約1.2cmの棒状の鉄製品片である。上述の土坑1022出土土製品の芯材として用いられていた鉄片と類似した形態である。1021は「洪武通寶」の銘のみえる銅銭である。洪武通寶は1368～1398年に明により発行されている。

以上、1層から出土した遺物は17・18世紀を中心とした時期の所産と考えられる。先章にも述べたように、1層は近世形成土層を近代以後に攪乱して形成されたと考えられる。本来の遺構形成の主な時期は江戸時代全般にわたっていたことが、1層出土遺物からも確認できる。

土坑2001出土遺物 (図29・写真19)

土坑2001からは、土師器皿・陶器・磁器・瓦片・土製品などが多量に出土している。図化・掲載が可能であったのは、23点であった。

3・10・14・23・19・15・12・6は土師器皿である。いずれも底部が平坦で、立ち上がり部がやや外反する形態で、内底面縁に弱い圏線がある。10については、口縁部内面に小さな端面が形成されている。23については体部外面に指押さえ痕がうかがえる。京Ⅻ期新～Ⅻ期古に相当する形態が主体である。25は焼塩壺底部である。内底面に強いナデ痕跡がうかがえる。浅黄色～橙色を呈する。60は瓦質捏鉢で、外面下部に指押さえ痕、内面に横方向の研磨痕が顕著である。

54は、灰白色軸を施した陶器小鉢で、灰色系の胎土色である。美濃瀬戸系陶器と考えられる。64は緑色軸を施した小皿で、灰色系の胎土色である。美濃瀬戸系陶器と考えられる。45は、灰軸を施した折縁菊皿で、灰色系の胎土色である。美濃瀬戸系陶器と考えられる。61は、灰白色軸を施した菊皿で、灰色系の胎土色である。美濃瀬戸系陶器と考えられる。32は口縁内面に圏線、内底面に絵付を施した志野向付である。63は、灰白色軸を施した小皿で、赤褐色系の胎土色である。肥前系陶器と考えられる。16は染付碗である。38は備前産播鉢である。

以上のような当遺構出土土器群は、土師器皿の形態に加え志野・瀬戸美濃系陶器主体の組成という特徴からも、16世紀後半～17世紀初頭の遺物群を主体としていると考えられる。当遺構は織豊期～江戸時代初頭に形成・埋没したと考えられる。

103は、菊水文軒平瓦で製作手法は不明である。24は石製品で暗色系の堆積石を素材としている。表裏面とも平滑に研磨されていて、厚さは約1.8cmである。視破片と考えられる。

1051・1052・1038は鉄製品破片である。1051は鉄製品の周囲に粘土がまきつけてあるので、先述の土坑1022出土土製品に類似した遺物の破片の可能性が高い。幅約1.2cmである。1052は幅約0.7cmの棒状の鉄製品で頭部がほぼ直角に屈曲している。使用時の屈曲とすれば、鏝の可能性が高い。1038は長方形の鉄板である幅約5.4cm厚さ0.4cmの大きさである。用途は不明。

土坑2002出土遺物 (写真20)

当遺構からは、土師器片などが出土しているが、1051は、板状の銅製品片である。片面中央に長軸方向に沿って鑄のような隆起がうかがえる。幅2.5cmで、欠損しているが長さ

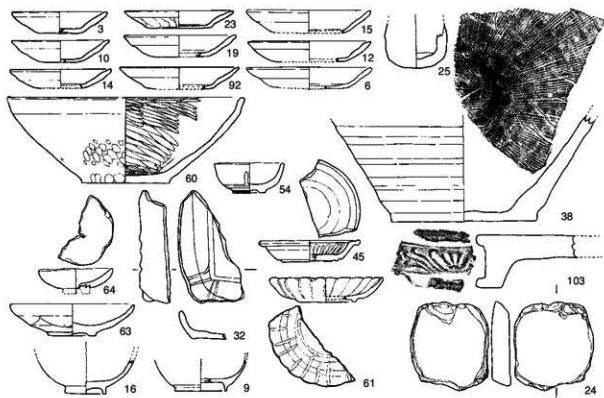


図29 土坑2007出土遺物 (1/4)



写真19 土坑2007出土遺物

5.5cm以上である。厚さは約0.1cmである。用途は不明である。

土坑2007出土遺物 (図29・写真21)

土坑2007からは、土師器皿を主体とし、陶器・瓦片・土製品などが少量出土した。図化・掲載が可能であったのは、5点であった。

18・20・26は土師器皿である。18は小型で底面が小さい。20は底面が平坦で口縁端部内面に小さく面を持つ形態である。26は、口縁部が外反して端部をつまみあげる形態である。26の形態からみると京Ⅺ期の土師器皿群と考えられる。109は、陶器大甕で、常滑産と



写真20 土坑2002出土遺物



図29 土坑2007出土遺物



写真21 土坑2007出土遺物



図30 土坑2008出土遺物 (1/4)



写真22 土坑2008出土遺物

考えられる。

土師器皿の形態およびそれが組成の中で主体を占める状況、肥前系陶器・磁器がみられないなどのことから、当遺構出土土器群の主体は16世紀で、遺構形成・埋没時期は織豊期と考えられる。

1046は、土製品破片である。幅約10cm、長さ12cm、厚さ3.5cmの大きさである。被熱により組織が発泡している状態である。炉壁もしくは鑄造関連の土製品と考えられる。

土坑2008出土遺物 (図30・写真22)

土坑2007からは、土師器皿を主体とし、陶器・瓦片・土製品などが少量出土した。このうち図化・掲載が可能であったのは、5点であった。

4・32・72は土師器皿である。いずれも平坦な底部から、外反するように立ち上がり、口縁部がやや上方に屈曲する形態である。4・32には外面に指押しえ痕がうかがえる。京X期新～XI期古の形態に相当する。35は、灰釉の陶器丸皿で灰色系胎土色である。瀬戸美濃産と考えられる。これら土師器皿の形態およびそれが組成の中で主体を占める状況、肥前系陶器・磁器がみられないなどのことから、当遺構出土土器群の主体は16世紀前半であろう。当遺構の形成・埋没時期は戦国期と考えられる。

1040は、土製品破片である。幅約12cm、長さ10cm、厚さ3.5cmの大きさである。被熱により平坦面の一部が黒化している状況がうかがえる。鑄造関連の土製品、特に鑄型の外型の可能性が高い。

溝2010出土遺物 (図31・写真23)

当遺構からは、土師器皿・瓦質土器・陶器・瓦・土製品が多量に出土している。図化・

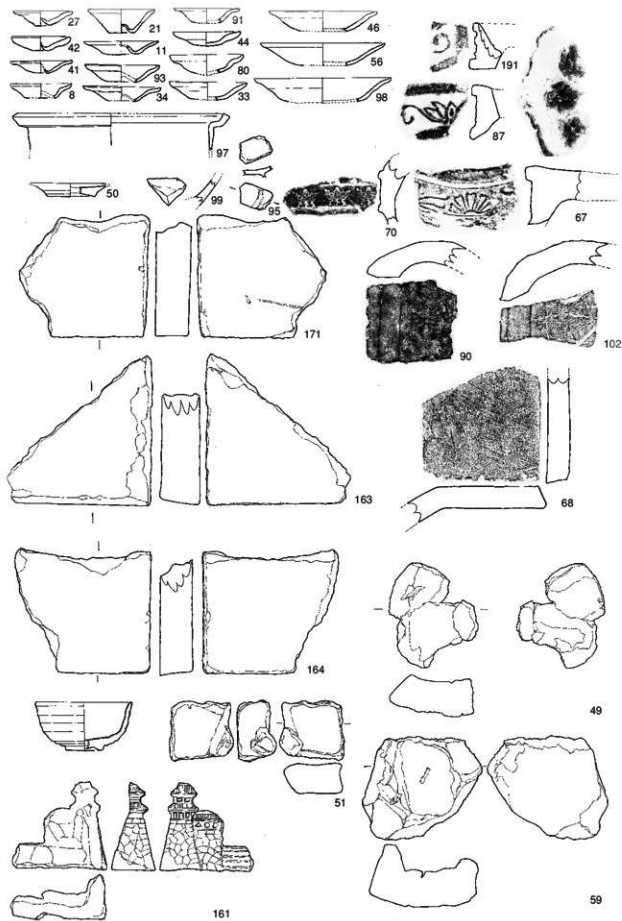


图31 汉2010出土遗物

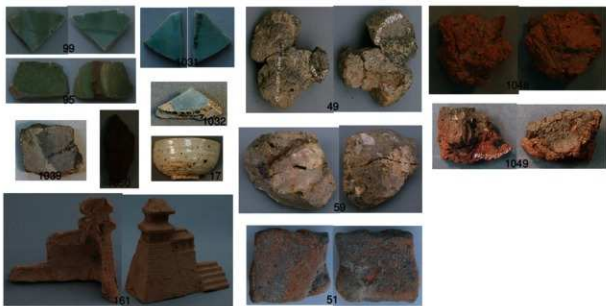


写真23 溝2010出土遺物

掲載可能だったのは、40点である。ただし、先述のように、当遺構は溝2010a・b・cという3時期にわたって掘削された溝である。厳密な遺物の弁別は難しかったが、概ね上層・中層・下層・最下層に分層して遺物のとりあげを行った。このうち上層は、溝2010aの最上層に相当する。46の土師器皿、51・59の土製品がそこからの出土遺物である。また、最下層は、溝2010b・cの埋土に相当する。99の青磁片、191の瓦、1039の土製品がそこからの出土遺物である。それ以外の掲載遺物はすべて、溝2010aの埋土と考えられる中層・下層出土資料である。

27・42・41・8・21・11・34は土師器皿で底面が隆起したいわゆるへそ皿である。外反して立ち上がり、口縁端部がつまみあげられる形態が主流を占める。また、91・44・80・33は底部が平坦な小型の土師器皿であるが、外反して立ち上がり、口縁端部がつまみあげられる形態は共通している。46・56・75はやや大きめの土師器皿で、上層出土の46以外は口縁端部がつまみあげられる形態である。このように、上層出土の46以外は口縁形態に共通性が高い。溝2010a中・下層出土の土師器皿は概ね京X期に相当する形態が主体である。

97・70は瓦質土器である。97は口縁部が明確につまみあげられた鍋で15世紀以前の特徴を持っている。70は瓦質火鉢で内傾する口縁端部の破片と考えられる。50・17は、美濃瀬戸系陶器で、前者は皿、後者は碗である。いずれも溝2010a中・下層出土である。95・99・1031・1032はいずれも青磁破片である。95は溝2010b～c出土、それ以外は溝2010a中・下層出土である。いずれも細片であるが、中国産と考えられる。

191・37・67・90・102・68は瓦である。191は軒平瓦で、唐草文端部がうかがえる。溝2010b～c出土である。それ以外はすべて溝2010a出土である。102は最上層出土品である。67は菊花唐草文が施されていて花卉は輪郭線で表現されている。相国寺造営期の瓦に類似した文様のものが報告されている。90・102は丸瓦片、68は平瓦片で、いずれも内面に布目痕がうかがわれる。171・163・164は、ともに板状の瓦質製品の破片である。まったく反りがみられないことから、瓦ではなく磚と考えられる。いずれも全形は不明であるが、厚

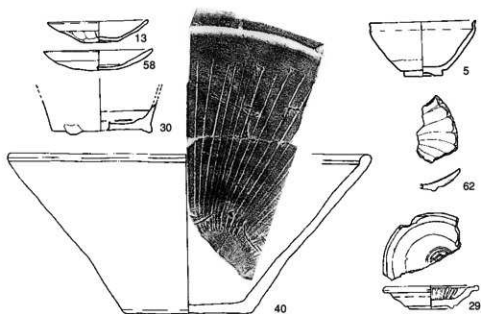


図32 溝2011出土遺物 (1/4)

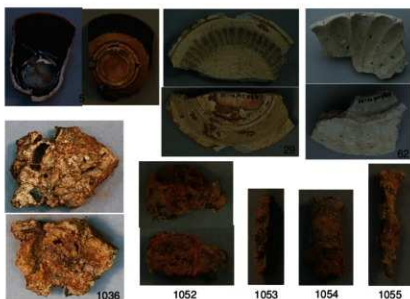


写真24 溝2011出土遺物



写真25 溝2012出土遺物



図33 土坑2022出土遺物 (1/4)



写真26 土坑2022出土遺物

さは約4cm程度で一辺は20cmを越えると推定される。

これら、土器類・瓦の型式学的帰属年代の主体はいずれも15世紀にあると推定できる。したがって、主要な遺物が出土した溝2010a中～下層は室町時代後半に埋没したと考えるべきであろう。溝2010a最上層については近世遺物も含むことから、溝埋没過程で落込み化した

た地形に近世に堆積が進行したと考えられる。ただし、溝2010b・cについては、その埋土に伴って時期判断の可能な土器類が出土していない。現状では、15世紀以前に形成されたということしかわからない状態である。

49・59・51・1048・1049は土製品である。いずれも被熱により表面が赤化している。特に49・59・51は表面の一部が高温を受けて発泡している状態である。この3点は一部に平坦面をもっているが、破片のため全体形態は不明である。炉壁もしくは鋳型の破片と考えられる。1048・1049は胎土中に植物繊維を多量に含んでいる。炉壁の一部と考えられる。これら4点は、鋳造関連遺物であろう。

161は、溝2010a最上層から出土した土製品で石垣と城建物をかたどっている。上述のように、溝2010a最上層は近世に堆積が進行したと考えられ、溝掘削・廃棄時ではなく後世の混入品と考えられる。

溝2011出土遺物（図32・写真24）

溝2011からは、土師器皿を主体とし、陶器・瓦片・土製品などが少量出土した。このうち図化・掲載が可能であったのは、12点であった。

13・58は土師器皿である。いずれも内底面には圈線がうかがわれる。13は外面に指押さえ痕がうかがわれる。京X期の土師器皿形態に相当する。

30は無釉の陶器で平坦な底部から直立する体部形態である。底面中央に円孔があり、底面縁には3箇所に小さな支脚が付帯している。植木鉢と考えられる。40は、陶器鉢で口縁部内面に太い沈線をもつ形態である。内面の摺り目は単線が連続する形態である。丹波産鉢鉢と考えられる。5は、天目碗で胎土色が褐色系を呈する。肥前系陶器と考えられる。29は、灰釉の折れ折縁皿である。瀬戸美濃系陶器と考えられる。62は、厚い灰白色釉を施した皿で、志野菊皿である。

これら、出土土器の大半は土師器皿をはじめとして、16世紀後半～17世紀初頭を中心とした型式のものが主体を占める。磁器類もほとんど混じらない。このことから、当遺構の機能・埋没は織豊期～江戸時代初頭と考えられる。

溝2012出土遺物（写真25）

溝2012からは、土師器皿・陶器・磁器・瓦片などが少量出土した。図化可能な個体はほとんどなかった。ここでは2点の青磁を報告する。1028は、碗の一部と考えられる。小片のため、産地などは不明。1029は、青磁碗口縁部片である。龍泉窯系青磁で、外面に退化した蓮弁文がうかがわれる。15世紀後半から16世紀の所産と考えられる。

土坑2022出土遺物（図33・写真25）

土坑2012からは、土師器皿・陶器・磁器・瓦片などが少量出土した。細片が多く、図化可能な個体はほとんどなかった。唯一青磁1点を掲載する。43は明青色の発色をもつ青磁片で、皿と考えられる。口縁端部内面に縁取り線が描かれる。肥前系磁器と考えられる。



図34 2層出土遺物

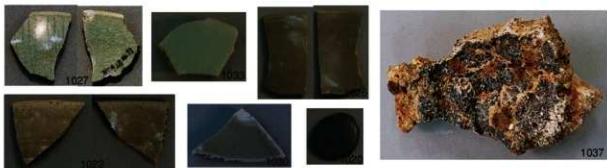


写真27 2層出土遺物

2層出土遺物（図34・写真27）

2層からは、土師器皿・陶器・磁器・瓦片などが出土しているが、細片が多く図化できる個体はほとんどない。陶磁器や特殊遺物のみをとりあげて報告する。

69は、軒瓦片である。唐草文様の一部が見られる。顎貼り付けにより作られている。

1027・1030・1033は青磁片である。1027は外面に退化した形態の蓮花文がうかがわれる。龍泉窯系青磁で16世紀の所産と考えられる。1022・1026はいずれも陶器碗片で、浅緑色の釉色で、胎土は淡黄褐色である。瀬戸美濃系陶器であろうか。

1020は径2.2cm・厚さ0.5cm程度の、不整円形の黒色石である。基石と考えられる。1037は、被熱した土製品で、碗状製品の破片と考えられる。内面に金属滓もしくは土製品壁体が溶解したと考えられるものが鉛状に付着している。铸造関係遺物で、炉壁もしくは大型のとりべ破片と考えられる。

5. まとめ

今回の調査は、面積約90㎡と小規模なものであった。しかし、主要な2つの遺構面の調査成果からは、烏丸今出川地点における、戦国期～近世の土地利用変遷の一端をうかがうことができた。

出土遺物から見ると、第1遺構面で検出された時期判定の可能な遺構は、江戸時代前半を中心とした時期に形成・埋没した可能性が高い。基本層序に記述で確認したように、地表面下1mくらいまでは、近世遺物は多数出土するものの、現代の攪乱を受けていて遺構検出はできなかった。おそらく、近接する本学図書館建設時に攪乱をうけたものと思われる。第1遺構面検出遺構が江戸時代前半期を中心とする理由は、江戸時代後半に形成された遺構群が攪乱をうけて破壊されてしまっているためと考えられる。

言い換えれば、不完全ながら17世紀を中心とした遺構群のみを第1遺構面で検出したことになる。近世に作成された京内のさまざまな絵地図からは、17世紀末以後は「竹内殿」と表現された公家屋敷が烏丸今出川通交差点の北東隅に存在したことがわかっている。しかし、17世紀中ごろには、烏丸今出川通に北接する「徳大寺殿」屋敷地と烏丸今出川辻との間の区画が、特定の公家・武家の屋敷地として表現された記録はない。この区画は16-17世紀の大半の時期には、烏丸通沿いにひろがる町家の一角であったと考えられる。17世紀代の遺構が主となる検出された第1遺構面では、町家として当調査区地点が機能していた時期の遺構を多く検出したことになる。

そのことと関連していると考えられるが、第1遺構面出土遺物の多くからは、鑄造に関わると考えられる土製品が多く出土している。炉壁片が多く、一部には鑄型の外型片も含まれている。従来の調査でも、本学今出川校地からは、鑄造関係品が多く出土している。鑄物業に携わる建物が烏丸今出川通近辺に多く所在したことを示す資料が今回の調査でも確認できた。公家屋敷地にかわる以前には鑄物に関わる町家が調査地点に所在したものと想定できる。実際に検出された遺構は土坑が多く、ごみ穴と考えられる土坑が多かったが、一部には炭片や焼土を多量に含む埋土層形成がうかがわれるものも少なくなく、これらは鑄造炉の破壊・廃棄に関連して形成された堆積層と考えられる。

また、第2a・b遺構面で検出された遺構の主な時期は、15～16世紀である。中世後半～織豊期の京内を描いたものとして、上杉家本「洛中洛外図屏風」が有名である。そこには戦国期には当地点が「伊勢守」の屋敷地であったとして描かれている（黒田絃一郎「中世都市京都の研究」・山田邦和「戦国期上京の復元」『考古学に学ぶ(II)』）。このことから、烏丸北小路辻の北東区画は室町幕府の政所執事であった伊勢氏の居宅と考えられている。第2遺構面で検出された遺構群のいくつかは、伊勢氏居宅に付帯する施設と考えられる。

特に注目されるのが溝2010a・b・cである。溝2010aは、中・下層の出土遺物から、その形成が15世紀に遡ることは確実である。現状での時期認識が正しければ、15～16世紀の応仁・文明の乱から戦国期に溝2010aが形成・機能していたと考えられる。また、溝2010b・cの形成年代は出土遺物が僅少なため確定できないが、それらをそのまま再掘削して溝2010aが形成されたことを考慮すると、15世紀代を中心とした堀状遺構と考えるべきであろう。おそらく当該期の戦乱に関連して設けられた施設と考えられる。ただし、当調査区東約50mの位置にある本学徳照館建設に関する調査では、この東西方向の堀状遺構の延長部は検出されていない。また、絵画資料からは「伊勢守」邸の東限については不明である。こ

のことから、堀状施設の規模や全体形態については不明な点が多い。

以上のように、今回は面積約90㎡の小規模な発掘調査であったが、烏丸今出川における戦国期～近世初頭の土地利用変遷を考える上で一定のデータを得ることができた。今後、近辺での調査例によって、当調査成果の位置づけがさらに進むものと思われる。



図35 「京都大絵図」（元禄四年版）にみる烏丸今出川近辺

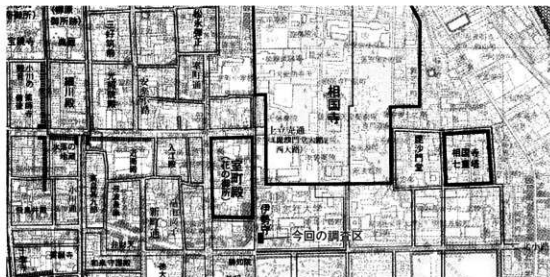


図36 上杉家本洛中洛外図から復元した戦国期の上京東部
(山田2003に加筆)

報告書抄録

ふりがな	どうししゃだいがくこうないいせきはつくつちようさほうこくしょ						
書名	同志社大学構内遺跡発掘調査報告書（2003・2005年度）						
副書名	「伊勢守」邸跡・相国寺旧境内の発掘調査						
シリーズ名	同志社大学歴史資料館調査研究報告						
シリーズ番号	第7集						
編著者名	池田公徳・若林邦彦						
編集機関	同志社大学歴史資料館						
所在地	〒610-0394 京田辺市多々羅郡谷1-3 TEL 0774-65-7255						
発行年月日	西暦2007年5月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度 (世界測地系)	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号				
しょうこくじきょうけいだい 相国寺旧境内	きょうとじきみぎやうく 京都市上京区 げんくまらやう 玄武町	26100	229	北緯 35°01'45" 東経 135°45'34"	2006.2.25～ 2006.3.28.	90㎡	同志社大学コジエネ レーション施設建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
相国寺旧境内	都市遺跡	安土桃山時代・ 江戸時代	土 坑	土師器・陶器・磁器・ 瓦・土製品・銅製品・ 鉄製品			
		安土桃山時代・ 江戸時代	石 組	土師器・陶器・磁器・ 瓦・土製品・銅製品・ 鉄製品			
	戦国時代	溝・堀	土師器・陶器・瓦・ 土製品・銅製品・鉄 製品				

本報告の作成について

1. 発掘調査および報告書作成にかかわる費用は、同志社大学が負担した。
2. 発掘調査は、同志社大学歴史資料館辰巳和弘教授の助言のもと、専任講師若林邦彦が現地調査を指揮して、2005年度におこなった。また、基準点のGPS測量および、動物遺体の鑑定に際して、文化情報学部津村宏臣専任講師の協力を得た。
3. 現地調査に際しては、本学文学部松藤和人教授・文化情報学部鶴柄俊夫助教授・理工学研究所中川要之助助教授・花園大学（現 同志社女子大学）山田邦和教授・京都市文化財保護課梶川敏夫課長・堀大輔技師からご教示・ご指導をいただいた。
4. 遺物整理作業・報告書の作成は、2006年度に京田辺校地の歴史資料館においておこなった。
5. 報告書の執筆は、「4. 出土した遺物」を池田公徳と若林が、それ以外はすべて若林が執筆した。出土土器類については、小森俊寛「京から出土する土器の編年的研究」に準拠して、時期表記を行った。
6. 発掘調査および報告書作成作業は、以下の学生・非常勤職員が行った。
手嶋美香・田口信子・池田公徳・清水邦彦・佐藤純一・宮城一木・鈴木康高・松山理恵・三森文絵・小野原彩香・大本朋弥・網島京子・村井杏有美・山下奈津美

同志社大学構内遺跡発掘調査報告書
(2003・2006年度)

同志社大学歴史資料館調査研究報告第7集

2007年5月31日

編集・発行：同志社大学歴史資料館
京田辺市多々羅都谷1-3

印刷：石田大成社